

有価証券報告書

(第66期)

自 2018年4月1日
至 2019年3月31日

夕力ノ株式会社

長野県上伊那郡宮田村137番地

目次

	頁
表紙	
第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	6
5. 従業員の状況	7
第2 事業の状況	8
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	8
2. 事業等のリスク	9
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	12
4. 経営上の重要な契約等	21
5. 研究開発活動	21
第3 設備の状況	22
1. 設備投資等の概要	22
2. 主要な設備の状況	22
3. 設備の新設、除却等の計画	23
第4 提出会社の状況	24
1. 株式等の状況	24
(1) 株式の総数等	24
(2) 新株予約権等の状況	24
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	24
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	24
(5) 所有者別状況	24
(6) 大株主の状況	25
(7) 議決権の状況	26
2. 自己株式の取得等の状況	26
3. 配当政策	27
4. コーポレート・ガバナンスの状況等	28
(1) コーポレート・ガバナンスの概要	28
(2) 役員の状況	31
(3) 監査の状況	35
(4) 役員の報酬等	37
(5) 株式の保有状況	38
5. 経理の状況	40
1. 連結財務諸表等	41
(1) 連結財務諸表	41
(2) その他	74
2. 財務諸表等	75
(1) 財務諸表	75
(2) 主な資産及び負債の内容	86
(3) その他	86
第6 提出会社の株式事務の概要	87
第7 提出会社の参考情報	88
1. 提出会社の親会社等の情報	88
2. その他の参考情報	88
第二部 提出会社の保証会社等の情報	89

[監査報告書]

[内部統制報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月27日
【事業年度】	第66期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	タカノ株式会社
【英訳名】	TAKANO CO., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 鷹野 準
【本店の所在の場所】	長野県上伊那郡宮田村137番地
【電話番号】	(0265) 85-3150 (代表)
【事務連絡者氏名】	常務取締役 大原 明夫
【最寄りの連絡場所】	長野県上伊那郡宮田村137番地
【電話番号】	(0265) 85-3150 (代表)
【事務連絡者氏名】	常務取締役 大原 明夫
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

(注) 第66期有価証券報告書より、日付の表示を和暦から西暦に変更しております。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第62期	第63期	第64期	第65期	第66期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	18,378,287	21,381,804	21,897,405	21,696,437	23,657,329
経常利益 (千円)	453,691	1,011,622	1,192,943	1,209,393	1,291,970
親会社株主に帰属する当期純利益 (千円)	339,048	648,962	845,312	885,746	959,060
包括利益 (千円)	710,961	305,511	1,062,692	918,909	881,629
純資産額 (千円)	26,652,277	26,836,189	27,746,892	28,453,055	29,121,938
総資産額 (千円)	34,345,446	35,862,237	35,169,863	38,036,406	38,225,073
1株当たり純資産額 (円)	1,753.87	1,765.98	1,825.91	1,872.38	1,916.40
1株当たり当期純利益 (円)	22.31	42.71	55.63	58.29	63.11
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	77.6	74.8	78.9	74.8	76.2
自己資本利益率 (%)	1.3	2.4	3.1	3.2	3.3
株価収益率 (倍)	28.1	14.4	18.2	15.9	13.7
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	395,764	△1,248,958	2,947,443	1,271,514	1,149,256
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	249,676	80,826	309,221	△1,642,896	△2,357,703
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△227,912	△285,117	△179,966	△190,447	△390,722
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	9,468,419	7,957,876	11,009,914	10,452,102	8,840,558
従業員数 (人)	497	508	525	561	597
(外、平均臨時雇用者数)	(96)	(98)	(97)	(98)	(110)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第62期	第63期	第64期	第65期	第66期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	15,864,808	18,763,188	19,085,330	19,352,376	20,547,264
経常利益 (千円)	360,157	821,539	1,016,579	1,048,836	1,026,445
当期純利益 (千円)	283,442	527,343	744,535	785,856	778,555
資本金 (千円)	2,015,900	2,015,900	2,015,900	2,015,900	2,015,900
発行済株式総数 (千株)	15,721	15,721	15,721	15,721	15,721
純資産額 (千円)	25,440,319	25,603,026	26,319,352	26,933,441	27,413,707
総資産額 (千円)	32,576,294	33,941,327	33,079,657	36,063,275	35,967,682
1株当たり純資産額 (円)	1,674.12	1,684.83	1,731.97	1,772.38	1,803.99
1株当たり配当額 (円)	8.00	10.00	14.00	14.00	16.00
(うち1株当たり中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益 (円)	18.65	34.70	48.99	51.71	51.23
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	78.1	75.4	79.6	74.7	76.2
自己資本利益率 (%)	1.1	2.1	2.9	3.0	2.9
株価収益率 (倍)	33.6	17.7	20.6	17.9	16.9
配当性向 (%)	42.9	28.8	28.6	27.1	31.2
従業員数 (人)	431	435	445	480	516
(外、平均臨時雇用者数)	(88)	(89)	(89)	(90)	(101)
株主総利回り (%)	115.2	114.7	189.1	176.6	168.2
(比較指標：配当込みTOPIX)	(130.7)	(116.5)	(133.7)	(154.9)	(147.1)
最高株価 (円)	662	940	1,078	1,364	1,151
最低株価 (円)	503	559	577	881	735

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 第64期の1株当たり配当額には、創業75周年記念配当2円を含んでおります。

3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を当事業年度の期首から適用しており、前事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

年月	事項
1941年7月	東京府向島区（現東京都墨田区）において個人で鷹野製作所を創業
1953年7月	各種ばねの製造・販売を目的として長野県上伊那郡宮田村に資本金30万円で株式会社タカノ製作所を設立
1954年8月	長野県上伊那郡宮田村に薄板ばね、線ばね製造の宮田工場を新設
1962年3月	ばねで培った技術をもとに、折畳ばね椅子を開発
1963年10月	横浜市緑区（現都筑区）に、自動車部品製造の横浜工場を新設
1966年12月	宮田工場内に椅子の製造ラインを設置
1968年3月	工具・機械等の仕入れを円滑にするため、関係会社として日光商事株式会社（現株式会社ニッコー）を設立
1968年11月	コクヨ株式会社と取引を開始
1969年10月	長野県伊那市に椅子製造の沢渡工場（現伊那工場）を新設
1973年8月	社名をタカノ株式会社に変更
1979年9月	専用機、金型の設計、製作、販売を行うため、関連会社としてタカノ機械株式会社を設立
1982年3月	伊那工場内でエクステリア製品の製造を開始
1983年12月	長野県上伊那郡宮田村にエレクトロニクス関連製品製造の特品工場を設置
1985年8月	長野県伊那市に、高級事務用回転椅子製造の下島工場を新設
1985年8月	産業機器（電磁アクチュエータ）を開発、製造・販売
1985年9月	東京都千代田区に東京事務所（現東京営業所）を設置
1987年6月	画像処理装置第1号機を完成
1989年3月	長野県上伊那郡宮田村にエクステリア製品製造の南平工場（現検査計測装置製造）を新設
1992年4月	エレクトロニクス関連製品の製造・販売一元化のため、タカノ販売株式会社（1985年9月設立）を吸収合併
1994年2月	北海道函館市に検査計測装置開発を行う函館事業所を開設
1994年5月	東京大学に原子間力顕微鏡を納入
1995年7月	日本証券業協会に当社株式を店頭売買銘柄として登録
1996年12月	I S O 9001 認証取得（電磁アクチュエータ）
1997年2月	東京証券取引所市場第二部に当社株式を上場
1997年11月	I S O 9001 認証取得（オフィス家具）
1999年1月	長野県駒ヶ根市にエクステリア製品の製造兼物流拠点として馬住工場（兼倉庫）を新設
1999年3月	I S O 14001 認証取得（オフィス家具）
1999年3月	I S O 9001 認証取得（エクステリア）
1999年8月	I S O 9002（現在は I S O 9001）認証取得（宮田工場）
1999年9月	I S O 9001 認証取得（画像処理検査装置）
2001年9月	I S O 14001 認証取得（本社、健康福祉・ユニット部門、エクステリア、エレクトロニクス関連）
2004年3月	当社株式が東京証券取引所市場第一部に指定
2005年2月	台湾における検査計測装置のメンテナンスおよびサービス強化の目的で、台湾鷹野股份有限公司を設立
2010年1月	中国におけるオフィス用椅子等の販売強化の目的で、上海鷹野商貿有限公司を設立
2011年8月	アジア地域における電磁アクチュエータの販売強化の目的で、香港鷹野国際有限公司を設立
2012年7月	I S O 9001 全社（全部門）統合認証の取得
2014年7月	大阪市北区に大阪営業所を設置
2017年11月	半導体等関連分野外観検査装置事業の譲受にともない、埼玉県川口市に埼玉事業所を設置
2018年10月	大分県大分市に大分 C S センターを設置

3 【事業の内容】

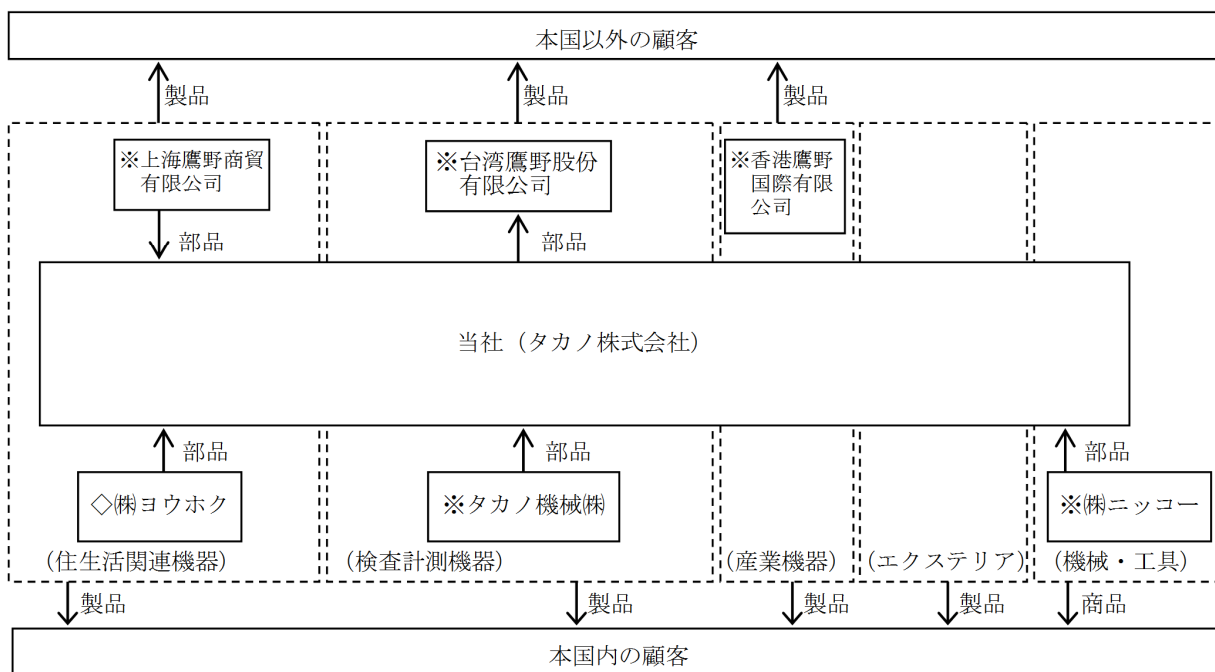
当企業集団は、当社および子会社5社、関連会社3社により構成されており、オフィス用、福祉・医療施設用の椅子等の製造・販売に係る「住生活関連機器」、液晶等の検査計測装置等の製造・販売に係る「検査計測機器」、電磁アクチュエータ等の製造・販売およびユニット（ばね）製品の製造・販売に係る「産業機器」、エクステリア製品の製造・販売に係る「エクステリア」、機械・工具等の販売に係る「機械・工具」を主たる業務としております。

事業内容と当社および関係会社等の当該事業に係わる位置づけならびにセグメントとの関連は次のとおりであります。

- (1) 住生活関連機器……………主要な製品は事務用回転椅子、折畳椅子、会議用椅子等のオフィス用の椅子、車椅子等の福祉・医療施設用の椅子等であります。
オフィス用椅子……………持分法非適用関連会社である株式会社ヨウホクから材料部品の一部を購入し、当社がオフィス用の椅子を製造し、顧客に販売するほか、子会社である上海鷹野商貿有限公司が主としてオフィス用の椅子を仕入れ、国内および中国の顧客に販売しております。
福祉・医療施設用椅子………当社が製造・販売するほか、一部の製品は子会社である上海鷹野商貿有限公司が仕入れ、中国の顧客に販売しております。
- (2) 検査計測機器……………主要な製品は液晶等のフラット・パネル・ディスプレイ検査装置、半導体パッケージ検査装置、フィルム検査装置、太陽電池検査装置、原子間力顕微鏡等の検査計測装置等であります。
一部のユニットを子会社であるタカノ機械株式会社より購入し、当社が製造・販売しております。また、台湾における顧客のメンテナンスおよびサービスは子会社である台湾鷹野股份有限公司が行っております。
- (3) 産業機器……………主要な製品は産業用機械に用いられる電磁アクチュエータおよびそのユニット品等ならびにユニット（ばね）製品であります。
産業機器は当社が製造・販売するほか、中国等の一部の海外顧客に対しては子会社である香港鷹野国際有限公司が販売しております。
- (4) エクステリア……………主要な製品は跳ね上げ式門扉、カーポート、テラス、オーニング等のエクステリア製品であります。
エクステリア製品は当社が製造・販売しております。
- (5) 機械・工具……………子会社である株式会社ニッコーが行う機械・工具等の販売に係る事業であります。

[事業系統図]

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) ※印は連結子会社、◇印は関連会社 (持分法非適用) を示します。

4【関係会社の状況】

連結子会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業内容	議決権の所有割合 (%)	関係内容
株式会社ニッコー	長野県上伊那郡宮田村	90	機械・工具	100	当社への商品の販売 役員の兼任あり。
タカノ機械株式会社	長野県上伊那郡宮田村	50	検査計測機器	100	当社への検査計測装置ユニット等機械設備の販売 役員の兼任あり。
台湾鷹野股份有限公司	中華民國台中市	69	検査計測機器	100	当社検査計測装置のメンテナンスおよびサービス 役員の兼任あり。
上海鷹野商貿有限公司	中華人民共和國上海市	47	住生活関連機器	100	当社オフィス用椅子等の仕入・販売 役員の兼任あり。
香港鷹野國際有限公司	中華人民共和國香港特別行政区	9	産業機器	100	当社電磁アクチュエータ等の仕入・販売 役員の兼任あり。

(注) 1. いずれも売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く）の連結売上高に占める割合がそれぞれ100分の10以下であるため主要な損益情報の記載を省略しております。

2. 「主要な事業の内容」欄にはセグメントの名称を記載しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数 (人)
住生活関連機器	203 (40)
検査計測機器	222 (8)
産業機器	41 (38)
エクステリア	21 (8)
機械・工具	13 (9)
全社 (共通)	97 (7)
合計	597 (110)

- (注) 1. 従業員数は就業人員（当社グループ（当社及び連結子会社、以下同じ）からグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含んでおります。）であり、臨時雇用者数（契約社員、季節社員を含み人材会社からの派遣社員は除いております。）は（ ）内に年間の平均人員数を外数で記載しております。
2. 全社（共通）と記載されている従業員数は、特定のセグメントには区分できない管理部門に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数 (人)	平均年齢 (歳)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (円)
516 (101)	43.6	16.3	5,732,142

セグメントの名称	従業員数 (人)
住生活関連機器	193 (40)
検査計測機器	165 (8)
産業機器	40 (38)
エクステリア	21 (8)
全社 (共通)	97 (7)
合計	516 (101)

- (注) 1. 従業員数は就業人員（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含んでおります。）であり、臨時雇用者数（契約社員、季節社員を含み人材会社からの派遣社員は除いております。）は（ ）内に年間の平均人員数を外数で記載しております。
2. 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでおります。
3. 全社（共通）と記載されている従業員数は、特定のセグメントには区分できない管理部門に所属しているものであります。

(3) 労働組合の状況

当社および国内連結子会社一部の労働組合は、JAMタカノ支部と称し、当社本社に同組合支部が置かれ、2019年3月31日現在における組合員数は363人で上部団体のJAMに加盟しております。

なお、労使関係は安定しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社グループは経営の基本的な考え方、目指すべき姿として「常に高い志を持ち、社会のルールを守り、持続的成長・発展を通じ、豊かな社会の実現に貢献する。」を掲げ、株主・顧客・従業員・社会の視点から見た企業価値の向上を図ることを通じて、豊かな社会の実現に貢献していくことを基本的な姿勢としております。

(2) 経営戦略等および経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループは、2017年3月期から2021年3月期までの5年間の中期経営計画「Innovation 68」を策定し、計画に基づき、経営を進めております。

中期経営計画「Innovation 68」の概要および目標指標は以下のとおりであります。

①中期経営計画基本方針

「構造改革とプロセス改革を進め、稼ぐ力を取り戻し、次の成長路線を構築する。」

②中期経営目標

2021年3月期目標	連結売上高	30,000百万円	
	連結営業利益	3,000百万円	(売上高営業利益率 10.0%)
	連結経常利益	3,100百万円	(売上高経常利益率 10.3%)

③全社的重点施策の概要

- ・連結経営体制の強化を図る。
- ・新分野・成長分野開拓の道筋をつける。
- ・全体効率の視点で生産効率向上策と原価低減を徹底的に進め、競争力を高める。(毎年10%以上の生産性向上)
- ・グローバル化の推進を行う。(グローバルの視点で考え、行動する。)
- ・M&A・事業提携等を通じた成長の実現を図る。
- ・不採算分野の方向付けと事業構造を変革させる。
- ・強固な財務基盤の維持と新規分野・成長分野への積極投資の両立。
- ・CSRの推進に向けて、人材・環境分野で重点的な活動を進める。
- ・コーポレート・ガバナンスの強化。

なお、当社グループでは以上の中期経営計画「Innovation 68」を策定し、計画の推進を行ってまいりましたが、昨今の経営環境の変化、足元における業績および施策の進捗状況等を鑑み、施策内容等の再度見直しを行い、「Innovation 68」の目標とする経営成績目標を2023年3月期に達成するべく、中期経営計画の見直しを行うことといたしました。

現在、中期経営計画の見直し策定作業を行っておりますが、本年9月末を目途に計画をとりまとめ、あらためて当該計画をお知らせさせていただく予定です。

(3) 経営環境

今後の見直しにつきましては、雇用・所得環境の改善による個人消費の増加傾向は維持されつつも、海外経済の減速による企業収益の落ち込みが懸念され、また、米国と中国の貿易摩擦や、英国のEU離脱問題の影響などから、先行きは依然として不透明な状況が続くものと思われま。

当社グループの主力製品が関係するオフィス家具業界におきましては、首都圏におけるオフィスビルの竣工の一時的な減少により、次事業年度におけるオフィス家具需要の伸びは頭打ちとなるものと思われま。

当社グループのもう一つの主力製品である検査計測装置に関連する液晶をはじめとするFPD(フラット・パネル・ディスプレイ)製造装置業界におきましては、大型液晶パネル価格の低下の影響により、液晶製造設備投資需要は軟調に推移するものと思われま。

(4) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社グループの主力製品であるオフィス用椅子が含まれる住生活関連機器事業においては、上記の現状認識のもと、製品設計・機能・コスト等の抜本的な見直しを通じて、需要を喚起し、販売の拡大に繋がりうる新製品の開発を継続して行うことおよびグローバルな調達体制を整備しコストダウンを推進することならびにロボット・3Dプリンター等の新しい設備やIoTの活用等により、製造ラインの更なる合理化と生産性の向上を果たすことを重要な課題として認識しております。また、事業横断的な営業情報活用により、既存事業のノウハウを活かせる新製品・新分野の事業化、販売拡大を行うことも重要な課題として認識しております。

当社グループのもう一つの主力製品である検査計測装置が含まれる検査計測機器事業においては、上記の現状認識のもと、中国・台湾を中心に大型液晶基板向け製造装置の需要獲得のための営業体制と製品競争力を向上させるための装置の標準化および新検査手法の開発と高機能フィルム・電池部材・自動車関連分野等FPD向け以外の検査装置分野に資源を集中投入し早期の販売拡大を通じてバランスのとれた事業構造を構築することおよび高精細ディスプレイ向け検査における顧客ニーズを満たすべく、さらに高精細な検査を可能とする技術開発を行うことを重要な課題と認識しております。

また、新規事業の事業化スピードの向上を図り、早期に新規事業を立ち上げ、将来の成長性を確保することを重要な課題として認識しております。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、当社グループの経営成績、財務状況等に影響を及ぼす可能性のあるリスクには以下のようなものがあり、投資家の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項として考えております。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日（2019年6月27日）現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 当社グループがとっている経営方針

① 参入事業分野が多岐にわたっていることに係るリスク

当社グループでは、「事業にはライフサイクルがある。」との考え方から単一事業を行うことによるリスクを回避するため、継続的に新規事業開発に取り組んでまいりました。そのため、オフィス用椅子、福祉・医療用椅子、検査計測装置、産業機器、エクステリア製品など事業分野が多岐にわたっております。このような方針をとり、参入分野が多岐にわたっているため、経営資源の集中化を行うことによる事業成長が阻害される可能性があり、それが当社グループの経営成績、財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。また、新規事業開発はそれが必ず一定の事業化まで結びつくという保証はなく、新規事業開発に経営資源を傾注させ、それが実を結ばなかった場合には、当社グループの経営成績、財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 検査計測機器事業の特許戦略について

検査計測機器事業においては、知的財産権の出願により技術が公開され、第三者への技術流出を防ぐという観点から、知的財産権の出願を積極的には実施しておりません。そのため、他社が当該事項に関する特許を出願した場合には、特許が成立する可能性があります。

また、当社グループでは製品開発の際に入念な知的財産権の調査を行うよう努めておりますが、第三者の知的財産権を侵害しない保証はなく、第三者から知的財産権侵害を理由とした販売差し止めや損害賠償請求等の訴えが提起される可能性があります。

(2) 財政状態、経営成績の異常な変動

投資有価証券の評価損に係るリスク

当社では、投資目的による有価証券の保有および事業の展開上必要と思われる企業への出資を行っており、今後行う可能性があります。そのような有価証券への投資においては、株価の著しい下落および投資先企業の業績が著しく低迷した場合、投資有価証券評価損が発生し、当社グループの経営成績、財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) キャッシュ・フローの状況の異常な変動

検査計測機器事業の資金回収期間に係るリスク

検査計測機器事業における検査計測装置の納入から検収までの期間は、業界の慣行から、当社グループの他の事業と比較して長期にわたるため、販売が急拡大した場合、同事業における棚卸資産は増加する傾向があり、それにともない運転資金も拡大し、営業キャッシュ・フローに異常な変動を与える要因となる可能性があります。

(4) 研究開発活動及び人材育成等について

① 研究開発活動に係るリスク

検査計測機器事業の属する業界は先端技術分野に属するため、技術の優劣が事業活動を左右することとなります。そのため、当社グループは研究開発活動を通じて常に先端技術の取り込みを行っておりますが、当該研究開発活動が予想された結果を出し、業績に結びつくという保証はありません。また、当社グループが技術革新に乗り遅れた場合においては、経営成績に重大な悪影響を及ぼす可能性があります。

② 人材の確保と育成に係るリスク

当社グループの事業は特定の経営者、有能な技術者に依存している部分があります。また、今後事業の成長を果たしていくためには、有能な技術者、経験豊富な営業・管理スタッフの確保・育成が重要な課題となっております。そのような人材を確保・育成できない場合または優れた人材が大量に離職した場合には、当社グループの事業活動が制約を受け、将来の成長、経営成績、財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 特定事業への依存について

① 住生活関連機器事業における主要顧客企業への依存に係るリスク

当社グループの住生活関連機器事業は、2019年3月期において当社グループの売上高の44.7%を占めており、特にオフィス用椅子を販売しているコクヨ株式会社への2019年3月期における当社グループ販売高比率は35.7%となっております。これらの分野における顧客企業への売上高は、顧客企業個別の要因等の当社グループが管理できない要因により大きな影響を受けます。顧客企業の予期しない契約の打ち切り、顧客の調達方針の変化、値下げ要求等は、当社グループの経営成績と財政状態に重大な悪影響を及ぼす可能性があります。

② 検査計測機器事業における特定業界への依存に係るリスク

当社グループの検査計測機器事業は、2019年3月期において当社グループの売上高の34.7%を占めております。検査計測機器事業の主力製品である検査計測装置の主要な需要先は日本・中国・台湾・韓国における液晶パネルメーカーであり、同装置事業の経営成績は液晶製造業界の設備投資動向に大きな影響を受けます。これらの業界の設備投資は市況の影響を受け、大きな需要変動が生じる可能性があります。

当社グループにおいては、日頃から顧客や外部機関等からの情報を分析することにより急激な需要変動を予測し、適切な経営判断を行えるよう努力をするとともに、急激な需要減少に備え、固定的費用に依存しない形での生産能力の向上に努めてはおりますが、当社グループの予想を超えて設備投資動向が急減した場合には、当社グループの経営成績と財政状態に重大な悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) その他

① 固定資産の減損会計について

当社グループにて保有している固定資産について、業績の状況および将来の見込みによっては、固定資産の減損により経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

② 競合について

当社グループの各事業では、安易な価格競争に陥ることの無いよう、製品開発、技術開発で競合他社に一步先んじることにより、差別化を図り、競争力を堅持するとの方針に基づいて事業展開を行っておりますが、競合他社により当社の技術、当社の製品の機能を上回る画期的新製品が開発・製造され、当社製品の競争力が低下する可能性は否定できません。また、市場環境・需要動向によっては競合他社との激しい価格競争を余儀なくされる可能性もあり得ます。このような場合、当社製品の競争力低下、価格の下落等により、経営成績及び財政状態に悪影響を与える可能性があります。

③ 製品の欠陥に係るリスク

当社グループにおいては、製品品質の向上を経営の最重点課題のひとつとして認識し、全社的な品質保証活動、品質管理活動に努めており、ほぼ全社の事業部門において世界的に求められている品質管理基準に従い各種製品を製造しております。しかし、全ての製品について欠陥がなく、将来品質保証に係る損失が発生しないという保証はありません。また、製造物責任賠償については保険に加入しておりますが、この保険が最終的に負担する賠償額を十分にまかなえるという保証もありません。大規模な品質保証上の問題や製造物責任賠償につながるような製品の欠陥は、多額のコストや当社グループの評価に重大な影響を与え、それにより売上高が低下し、当社グループの経営成績と財政状態に悪影響がおよぼす可能性があります。

④ 検査計測機器事業における為替・カントリーリスク

検査計測機器事業は、FPD（フラット・パネル・ディスプレイ）メーカー各社を顧客としておりますが、中国を含むアジア圏における設備投資は今後も拡大する見込みであり、そのため、検査計測装置の中国等アジア圏向け販売も拡大傾向で推移することが予測されます。

現在、同装置の主要な取引条件は円建て取引となっておりますが、今後は中国を中心として米ドル建て等の外貨建て取引が増加する傾向となっております。外貨建て取引がさらに拡大した場合においては円換算時の為替レート変動の影響を受けます。当社グループにおいては、必要に応じて為替予約等によりリスクを軽減させる措置を講じておりますが、予測を超えた為替変動は当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

また、これらの国等において予期せぬ法規制の変更、不利な政治的要因、テロ、戦争、その他の要因による社会的混乱が生じた場合、経営成績、財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑤ 地震等の天災地変に係るリスク

当社グループの主要事業所は長野県南部を中心として設置されております。

長野県南部は東海地震の想定対象範囲に属しており、震災等が発生した場合震度6弱の地震が想定されております。当社グループは、将来予測される大地震の発生に備え、当社資産が損傷、損失しないよう対策を順次講じており、事業継続計画の策定等も行っておりますが、その対応には限界があり、大地震発生後には一時的に生産活動が停止する可能性があるとともに、当社生産設備等に重大な影響を及ぼす可能性があります。

⑥ 公的規制に関するリスク

当社グループは、事業活動を行ううえで日本国内のみならず事業活動を行う各国において、国や公的機関からの事業・投資の許認可、独占禁止、通商、租税、労働、特許等の知的財産権、環境規制等のさまざまな公的規制を受けております。当社グループにおいては、これらの公的規制の遵守に努めているものの、公的規制は変化することが予想され、将来これらの公的規制を当社グループが遵守できない場合、当社グループの営む各事業の継続に影響を及ぼすような公的規制がかけられた場合には、当社グループの財政状態および経営成績に悪影響を与える可能性があります。

⑦ 外部製造委託先に関するリスク

当社グループにおいては、製品製造の一部を外部製造委託先に委託しております。重要工程での製造は社内において行うことを原則としており、また、2社以上の委託先に注文を行うよう努めてはおりますが、一部には重要な工程の外部委託、特定1社の委託先への継続注文も存在しております。

そのため、特定の外部委託先が事業継続困難となった場合には、製品の生産および販売に支障をきたす可能性があります。このような場合、製品の供給遅延等ともなる損害賠償、信用の低下等により、当社グループの経営成績に悪影響が生ずる可能性があります。

⑧ M&A、業務提携に関するリスク

当社グループは、今後求められる経営能力の早期獲得を目的に、業務提携、M&Aに関して積極的な姿勢を持っております。

業務提携、M&Aに関しては十分精査し、実施してまいります。その業務提携、M&Aにより期待された成果が出るという保証はなく、提携等の交渉が不調に終わった場合には当社の将来にわたる経営成績に影響を及ぼす可能性があります。また、現在提携関係にあるものとの不一致等により提携関係を維持できなくなった場合、経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

⑨ 情報通信システムとセキュリティに関するリスク

コンピュータネットワークや情報システムの果たす役割は年を追うごとにその重要性は高まり、情報システムの構築およびセキュリティ対策の確立は事業活動の継続にあって、不可欠のものとなっております。

当社グループにおいても、情報システムの保守、重要データの管理およびセキュリティ管理などの対策に万全を期しておりますが、情報通信ネットワークの断絶、基幹情報システムの停止、社内情報の漏洩・流出等が生じない保証はありません。このような場合、情報システムの利用不能ともなる損害、信用力低下、契約上の損害賠償請求等の損害が発生し、当社の経営成績に影響を与える可能性があります。

⑩ 重要な訴訟等に関するリスク

当社グループの国内外の活動においては、係争事件等により訴訟が提起される可能性を持っております。本資料提出日現在、経営成績および財政状態に重大な影響を及ぼす係争事件等はございませんが、今後そのような係争事件等が発生する可能性は皆無ではありません。

⑪ 役職員の不正行為に関するリスク

当社グループはコンプライアンスに関して内部統制の整備を行い、リスク対応力をつけるべく、より充実した内部管理体制を目指して努力してまいります。その内部統制は合理的範囲にとどまり、役職員による重大な過失、役職員の共謀等による不正、違法行為がなされないという保証はありません。かかる当社のリスク認識を超えた事象が発生した場合、予期せぬ損害が発生するとともに、当社の信用の失墜を招き、当社グループの経営成績および財政状態に悪影響が生ずる可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、雇用・所得環境の改善が持続するなか、個人消費の回復を背景に景気は緩やかな回復基調が続きました。しかしながら、米国と中国による貿易摩擦の長期化や、欧州を中心とした政治的リスクの高まりが懸念される等、景気の先行きは依然として不透明な状況が続いております。

当社グループの主力製品が関係するオフィス家具業界におきましては、主に首都圏における大規模オフィスビルの竣工等にもなう移転案件の増加により、オフィス家具需要は堅調に推移いたしました。

また、当社グループのもう一つの主力製品である検査計測装置に関連する液晶をはじめとするFPD（フラット・パネル・ディスプレイ）製造装置業界におきましては、中国などでTV用の大型液晶パネル向けの設備投資が継続して実施されたことにより、需要は好調に推移いたしました。

このような環境のもとで、当社グループは中期経営計画「Innovation 68」の達成に向け、計画の3年目にあたる当期は、計画の基本方針である「構造改革とプロセス改革を進め、稼ぐ力を取り戻し、次の成長路線を構築する」の実現を図るべく、計画で定める各施策の一層の具体化に努めてまいりました。

具体的には、2018年7月31日に、株式会社トプコンおよびその子会社である株式会社トプコンテクノハウスより、半導体ウェーハ表面検査装置事業（WM事業）およびプロキシミティ露光装置事業（TME事業）を譲り受けました。今後は、2017年11月に同社より譲り受けた外観検査装置事業（Vi事業）とともに当社既存事業との融合を図り、半導体関連検査装置分野の強化拡充を実現させてまいります。

この他には、グローバル販売、グローバル調達体制の拡充や、各種の事業提携活動、新規事業開発活動に注力するとともに、引き続き、ロボットやIoTを活用した製造ラインの合理化の推進や、間接業務合理化プロジェクトの推進等、生産性向上のための活動を進めてまいりました。

この結果、当連結会計年度の財政状態及び経営成績は以下のとおりとなりました。

なお、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を当連結会計年度の期首から適用しており、財政状態については遡及処理後の前連結会計年度末の数値で比較を行っております。

a. 財政状態

(資産)

当連結会計年度末における流動資産は前連結会計年度末と比較し、997百万円減少の24,037百万円となりました。これは主に、受取手形及び売掛金が841百万円増加した一方、現金及び預金が1,607百万円、商品及び製品が233百万円それぞれ減少したこと等によるものであります。

当連結会計年度末における固定資産は前連結会計年度末と比較し、1,186百万円増加の14,187百万円となりました。これは主に、当社伊那工場表面処理設備および排水処理施設の新設や横浜技術開発センター建設工事等により、有形資産合計が317百万円、余裕資金の運用の増加により投資有価証券が847百万円それぞれ増加したこと等によるものであります。

この結果、当連結会計年度末における総資産は38,225百万円となり、前連結会計年度末と比較し、188百万円増加いたしました。

(負債)

当連結会計年度末における流動負債は前連結会計年度末と比較し、377百万円減少の8,050百万円となりました。これは主に、検査計測装置の大口物件の納入により前受金が321百万円増加した一方、支払手形及び買掛金と電子記録債務の合計額が581百万円、流動負債のその他に含まれる未払金が157百万円それぞれ減少したこと等によるものであります。

当連結会計年度末における固定負債は前連結会計年度末と比較し、103百万円減少の1,053百万円となりました。これは主に、長期借入金が80百万円、退職給付に係る負債が18百万円それぞれ減少したこと等によるものであります。

この結果、当連結会計年度末における負債合計は9,103百万円となり、前連結会計年度末と比較し、480百万円減少いたしました。

(純資産)

当連結会計年度末における純資産は前連結会計年度末と比較し、668百万円増加の29,121百万円となりました。これは主に、利益剰余金が親会社株主に帰属する当期純利益の計上等により746百万円増加したこと等によるものであります。

この結果、自己資本比率は前連結会計年度末の74.8%から76.2%となりました。

b. 経営成績

当連結会計年度の経営成績は、主に検査計測機器事業および機械・工具事業の販売増加により、当連結会計年度の売上高は23,657百万円で、前連結会計年度比1,960百万円、9.0%の増収となりました。利益面につきましては、材料価格高騰の影響はあったものの、販売の拡大による粗利益額の増加により、営業利益1,136百万円（前連結会計年度比25百万円、2.3%の増益）、経常利益1,291百万円（前連結会計年度比82百万円、6.8%の増益）となりました。親会社株主に帰属する当期純利益は、特別損失に横浜市にある建物等にかかる固定資産除却損54百万円を計上した一方、特別利益に投資有価証券売却益88百万円を計上したこと等により、959百万円（前連結会計年度比73百万円、8.3%の増益）となりました。

セグメントごとの経営成績は次のとおりであります。

（住生活関連機器）

当セグメントは、当社、連結子会社上海鷹野商貿有限公司で構成され、主にオフィス用、福祉・医療施設用の椅子等の製造販売を行っております。

当セグメントにつきましては、ロボット化の推進やIoTの活用等による生産性向上活動や、新たな表面処理設備を導入し、要素技術の高度化を図ってまいりました。また、医療関連分野等向けの新製品開発とその市場導入活動に注力してまいりました。

この結果、オフィスビルの竣工増加にともないオフィス家具需要が底堅く推移したこと等により、売上高は10,572百万円で前連結会計年度比360百万円、3.5%の増収となりました。一方、利益面では、積極的なコスト削減活動に努めたものの、当事業年度中に行った設備投資に係る減価償却費増加の影響等により、セグメント利益は353百万円で、前連結会計年度比126百万円、26.4%の減益となりました。

（検査計測機器）

当セグメントは、当社、連結子会社タカノ機械株式会社および台湾鷹野股份有限公司で構成され、主に液晶等の検査計測装置等を製造販売しております。

当セグメントにつきましては、半導体関連検査装置分野の強化拡充に向けた活動に加え、高機能フィルムおよび電池部材向け検査装置の受注拡大に向け、販売活動に注力してまいりました。また、製品の競争力向上を図るべく、部材コストの低減を可能とする新検査手法の開発および間接業務の合理化推進によるコストの低減に取り組んでまいりました。

この結果、売上高は8,214百万円で前連結会計年度比1,366百万円、20.0%の増収となりました。利益面では、販売の増加による粗利益額の増加に加え、設計の標準化等の積極的なコストダウン活動による装置個別の収益性を高めたことにより、セグメント利益は508百万円で、前連結会計年度比231百万円、83.8%の増益となりました。

（産業機器）

当セグメントは、当社、連結子会社香港鷹野国際有限公司で構成され、主に電磁アクチュエータ、ユニット（ばね）製品等を製造販売しております。

当セグメントにつきましては、国内外の顧客に向けた積極的な営業提案活動、医療関連分野向け電磁アクチュエータの販売拡大および新たなコア加工技術開発等に取り組んでまいりました。

しかしながら、年度の後半より半導体関連分野向け製品の需要が低調に推移したことから、売上高は2,329百万円で前連結会計年度比64百万円、2.7%の減収となりました。利益面では、販売の減少および新たなコア技術に関する設備投資にともなう減価償却費増加等により、セグメント利益は179百万円で、前連結会計年度比107百万円、37.5%の減益となりました。

（エクステリア）

当セグメントは、当社が主に跳ね上げ式門扉、カーポート、テラス、オーニング、ガーデンファニチャー等のエクステリア製品を製造販売しております。

当セグメントにつきましては、集客施設におけるオーニング等の物件受注の拡大に向けた広告宣伝活動や販売活動に注力するとともに、東京オリンピック・パラリンピック関連施設向け需要の取り込みに向け、営業体制の拡充に取り組んでまいりました。

しかしながら、前年度と比較して大口の物件需要が低調であったことにより、売上高は910百万円で前連結会計年度比65百万円、6.7%の減収となりました。利益面では、積極的な経費削減活動等に努めたものの、セグメント損失は6百万円（前連結会計年度はセグメント損失0.1百万円）とわずかながら減益となりました。

(機械・工具)

当セグメントは、株式会社ニッコーによる機械・工具等の仕入販売に関する事業であります。

当セグメントにつきましては、新規顧客の開拓および既存顧客の需要掘り起こしに向け、販売促進活動に注力してまいりました。この結果、機械の大口物件の販売等により、売上高は1,630百万円で前連結会計年度比363百万円、28.7%の増収となりました。一方、利益面では収益性の高い商品分野の販売比率が低下したこと等により、セグメント利益は79百万円で、前連結会計年度比25百万円、24.0%の減益となりました。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金および現金同等物（以下「資金」という）は、たな卸資産の減少等により収入増となった一方、仕入債務の減少による支出および投資有価証券の取得による支出が増加したこと等により、前連結会計年度と比較して1,611百万円減少し、8,840百万円（前連結会計年度比15.4%減）となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における営業活動の結果得られた資金は、前連結会計年度と比較して122百万円減少の1,149百万円となりました。これは主に、たな卸資産の増減額が前連結会計年度の1,607百万円の増加から当連結会計年度は44百万円の減少と1,652百万円減少したことにより収入増となり、未収消費税の還付等により営業活動によるキャッシュ・フローのその他が前連結会計年度の351百万円の減少から当連結会計年度は404百万円の増加と756百万円増加したことにより収入増となった一方、売上債権の増加額が前連結会計年度と比較して706百万円増加したことにより支出増となったこと、仕入債務の増減額が前連結会計年度の1,362百万円の増加から当連結会計年度は573百万円の減少と1,935百万円減少したことにより支出増となったこと等によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における投資活動により支出した資金は、前連結会計年度と比較して714百万円増加し、2,357百万円となりました。これは主に、定期預金の預入と払戻にかかる収支が前連結会計年度と比較して279百万円の収入増となった一方、有形固定資産の取得による支出が前連結会計年度と比較して154百万円の増加となったこと、投資有価証券の取得による支出が892百万円増加したことにより支出増となったこと等によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における財務活動により支出した資金は、前連結会計年度と比較して200百万円増加し、390百万円となりました。これは主に、長期借入れによる収入が前連結会計年度と比較して200百万円減少したことにより収入減となったこと等によるものであります。

③ 生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
住生活関連機器 (千円)	9,667,612	△1.4
検査計測機器 (千円)	8,120,268	△1.8
産業機器 (千円)	2,011,548	△14.6
エクステリア (千円)	914,754	△5.5
機械・工具 (千円)	—	—
合計 (千円)	20,714,183	△3.2

(注) 1. 金額は販売価格によっており、セグメント間取引は相殺消去しております。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

b. 受注実績

当連結会計年度の受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高 (千円)	前年同期比 (%)	受注残高 (千円)	前年同期比 (%)
住生活関連機器	10,522,273	3.0	770,519	△6.1
検査計測機器	6,064,414	△42.2	7,125,364	△23.2
産業機器	2,304,425	△4.4	173,296	△12.5
エクステリア	920,308	△5.8	46,146	26.6
機械・工具	1,560,117	12.9	82,690	△46.1
合計	21,371,540	△16.1	8,198,016	△21.8

(注) セグメント間取引は相殺消去しており、消費税等は含まれておりません。

c. 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
住生活関連機器 (千円)	10,572,071	3.5
検査計測機器 (千円)	8,214,610	20.0
産業機器 (千円)	2,329,152	△2.7
エクステリア (千円)	910,617	△6.7
機械・工具 (千円)	1,630,877	28.7
合計 (千円)	23,657,329	9.0

(注) 1. セグメント間取引は相殺消去しております。

2. 最近2連結会計年度の主な相手先の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額 (千円)	割合 (%)	金額 (千円)	割合 (%)
コクヨ株式会社	8,041,139	37.1	8,437,006	35.7
AU Optronics Corporation	2,199,743	10.1	—	—

3. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

4. 当連結会計年度のAU Optronics Corporationへの販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合については、当該割合が100分の10未満となっているため記載を省略しております。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、本項に記載した予想、見込み等の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日（2019年6月27日）現在において判断したものであり、将来に関する事項には不確実性が内在されております。そのため、予測等の将来に関する事項は実際の結果と大きく異なる可能性があります。

① 重要な会計方針および見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたり、採用している重要な会計基準は「第5経理の状況 1連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）」に記載のとおりであります。

当社グループの連結財務諸表の作成においては、経営者による会計方針の選択や適用、資産・負債および収益・費用の報告および開示に影響を与える見積りを行う必要があります。その見積りは、過去の実績やその時点で入手可能な情報に基づく合理的と考えられる様々な要因を考慮して行っておりますが、実際の結果は見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りとは異なる場合があります。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

a. 財政状態

(流動資産)

当連結会計年度末における流動資産の残高は、前連結会計年度末と比較し997百万円減少の24,037百万円となりました。これは主に、受取手形及び売掛金が841百万円増加した一方、現金及び預金が1,607百万円、商品及び製品が233百万円それぞれ減少したこと等によるものであります。

(固定資産)

当連結会計年度末における固定資産の残高は、前連結会計年度末と比較し1,186百万円増加の14,187百万円となりました。これは主に、当社伊那工場表面処理設備および排水処理施設の新設や横浜技術開発センター建設工事等により、有形資産合計が317百万円、余裕資金の運用の増加により投資有価証券が847百万円それぞれ増加したこと等によるものであります。

(流動負債)

当連結会計年度末における流動負債の残高は、前連結会計年度末と比較し377百万円減少の8,050百万円となりました。これは主に、検査計測装置の大口物件の納入により前受金が321百万円増加した一方、支払手形及び買掛金と電子記録債務の合計額が581百万円、流動負債のその他に含まれる未払金が157百万円それぞれ減少したこと等によるものであります。

(固定負債)

当連結会計年度末における固定負債の残高は、前連結会計年度末と比較し103百万円減少の1,053百万円となりました。これは主に、長期借入金が80百万円、退職給付に係る負債が18百万円それぞれ減少したこと等によるものであります。

(純資産)

当連結会計年度末における純資産合計残高は、前連結会計年度末と比較し668百万円増加の29,121百万円となりました。これは主に、利益剰余金が親会社株主に帰属する当期純利益の計上等により746百万円増加したこと等によるものであります。

b. 経営成績

(概要)

当社グループの当連結会計年度の経営成績は、主に検査計測機器事業および機械・工具事業の販売増加により、当連結会計年度の売上高は23,657百万円で、前連結会計年度比1,960百万円、9.0%の増収となりました。利益面につきましては、材料価格高騰の影響はあったものの、販売の拡大による粗利益額の増加により、営業利益1,136百万円（前連結会計年度比25百万円、2.3%の増益）、経常利益1,291百万円（前連結会計年度比82百万円、6.8%の増益）となりました。親会社株主に帰属する当期純利益は、特別損失に横浜市にある建物等にかかる固定資産除却損54百万円を計上した一方、特別利益に投資有価証券売却益88百万円を計上したこと等により、959百万円（前連結会計年度比73百万円、8.3%の増益）となりました。

(売上高)

売上高は前連結会計年度と比較して9.0%増収の23,657百万円となりました。

住生活関連機器事業における売上高は、前連結会計年度と比較して3.5%増収の10,572百万円となりました。これは主に、首都圏における大規模オフィスビルの竣工等にもなう移転案件の増加により、オフィス家具需要が堅調に推移したこと等によるものであります。

検査計測機器事業における売上高は、前連結会計年度と比較して20.0%増収の8,214百万円となりました。これは主に、中国等でTV用の大型液晶パネル向けの設備投資需要が堅調に推移したこと等によるものであります。

産業機器事業における売上高は、前連結会計年度と比較して2.7%減収の2,329百万円となりました。これは主に、年度の後半より半導体関連分野向け電磁アクチュエータ製品の需要が低調に推移したこと等によるものであります。

エクステリア事業における売上高は、前連結会計年度と比較して6.7%減収の910百万円となりました。これは主に、前年度と比較して大口の物件需要が低調であったこと等によるものであります。

機械・工具事業の売上高は、前連結会計年度と比較して28.7%増収の1,630百万円となりました。これは主に、機械の大口物件の販売増加等によるものであります。

(売上原価、販売費及び一般管理費)

売上原価は、前連結会計年度の16,743百万円から1,585百万円増加し、18,329百万円となりました。売上高に対する売上原価の比率は積極的なコスト削減に努めたものの、77.5%と0.3ポイント悪化しました。しかしながら、売上高増加により売上総利益は連結会計年度の4,953百万円から375百万円増加し、5,328百万円となりました。

販売費及び一般管理費は、従業員数増加にもなう給料及び手当の増加等により、前連結会計年度と比較して9.1%、349百万円増加し、4,191百万円となりました。売上高に対する販売費及び一般管理費の比率は前連結会計年度と同じ17.7%となっております。

(営業利益)

以上の結果により、営業利益は、前連結会計年度と比較して2.3%増益の1,136百万円となりました。セグメント別の状況につきましては、住生活関連機器事業のセグメント損益は、積極的なコスト削減活動に努めたものの、当事業年度中に行った設備投資に係る減価償却費増加の影響等により、セグメント利益は353百万円（前連結会計年度比126百万円、26.4%の減益）となりました。

検査計測機器事業のセグメント損益は、販売の増加による粗利益額の増加に加え、設計の標準化等の積極的なコストダウン活動による装置個別の収益性を高めたことにより、セグメント利益は508百万円（前連結会計年度比231百万円、83.8%の増益）となりました。

産業機器事業のセグメント損益は、販売の減少および新たなコア技術に関する設備投資にもなう減価償却費増加等により、セグメント利益は179百万円（前連結会計年度比107百万円、37.5%の減益）となりました。

エクステリア事業のセグメント損益は、積極的な経費削減活動等に努めたものの、セグメント損失は6百万円（前連結会計年度はセグメント損失は0.1百万円）とわずかながら減益となりました。

また、機械・工具事業のセグメント損益は、収益性の高い商品分野の販売比率が低下したこと等により、セグメント利益は79百万円（前連結会計年度比25百万円、24.0%の減益）となりました。

(営業外損益)

営業外損益は、前連結会計年度の97百万円の収益(純額)から、155百万円の収益(純額)へと増加いたしました。これは主に、前連結会計年度は為替差損が17百万円生じていたものの、円安の進行により、当連結会計年度は為替差益が25百万円生じたこと等によるものであります。

(経常利益)

以上により、経常利益は、前連結会計年度と比較して6.8%増益の1,291百万円となりました。

(特別損益)

特別損益は、前連結会計年度は特別利益、特別損失ともに発生しておりませんが、当連結会計年度は33百万円の利益(純額)となりました。これは主に、特別損失に横浜市にある建物等にかかる固定資産除却損54百万円を計上した一方、特別利益に投資有価証券売却益88百万円を計上したことによるものであります。

(税金等調整前当期純損益)

以上により、税金等調整前当期純利益は、前連結会計年度と比較して9.6%増益の1,325百万円となりました。

(法人税等)

法人税、住民税及び事業税376百万円、法人税等調整額△10百万円の計上により、法人税等合計は366百万円となりました。

なお、繰延税金資産に関する詳細な内容は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (税効果会計関係)」に記載のとおりであります。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度と比較して8.3%増益の959百万円となりました。なお、1株当たり当期純利益は前連結会計年度比4円82銭増加の63円11銭となりました。

c. キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況につきましては、「(1) 経営成績等の状況の概要 ② キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

③ 経営成績に重要な影響を与える要因について

当社グループの経営成績に重要な影響を与える主な要因は以下のとおりであります。

当社グループは経営方針として、グローバル販売を含めた、グローバル化の推進を掲げておりますが、当社グループが今後とる海外市場向けの事業展開等によっては、当社グループの経営成績に重要な影響を与える可能性があります。

当社グループ住生活関連機器事業の主力であるオフィス家具業界において、2020年の首都圏におけるオフィスビル床面積は大幅に増加が見込まれるものの、企業の設備投資意欲の減退により、需要が大幅に減少した場合、また、国内オフィス家具市場に東南アジア等で生産される廉価品のオフィス椅子が大量に流入した場合は住生活関連機器の経営成績に重要な影響を与える可能性があります。

当社グループ検査計測機器事業の主力製品である検査計測装置の主要な需要先は日本・中国・台湾・韓国における液晶パネルメーカーであり、同装置事業の経営成績は液晶製造業界の設備投資動向に大きな影響を受けます。これらの業界の設備投資は市況の影響を受け、大きな需要変動が生じる可能性があり、今後の設備投資動向によっては、検査計測機器事業の経営成績に重要な影響を与える可能性があります。

また、当社グループは新規事業開発を積極的に取り組み、経営資源を新規事業開発に傾注させておりますが、新規事業開発に関する活動は予想された結果を出し、業績に必ず結びつくという保証はありません。新事業開発活動が順調に進まず、成果が実現できない場合は当社グループの将来にわたる経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

その他に、経営成績に重要な影響を与える要因には「第2 事業の状況 2 事業等のリスク」に記載した要因が考えられます。

④ 経営戦略の現状と見通し

当社グループといたしましては、これらの状況をふまえて、中期的な基本方針として「構造改革とプロセス改革を進め、稼ぐ力を取り戻し、次の成長路線を構築する」を掲げ、新たな取り組みにより新しい価値の創造と次の成長基盤の構築を目指してまいります。

セグメント別では、住生活関連機器事業においては引き続き、資材の調達コストの低減とロボット等の活用による製造ラインの合理化に努め、また2020年に拡大が予想される国内需要を取り込むべく、ボリュームゾーンの新製品開発を継続して行い、販売の拡大を目指してまいります。

検査計測機器事業においても、引き続きプロセス改革活動を今後さらに推進し、固定費圧縮を通じた利益体質の構築を図るとともに、半導体関連検査装置、高機能フィルム検査装置、燃料電池部材向け検査装置等、液晶向け以外の分野の販売拡大でバランスのとれた事業構造を構築すべく、新技術開発による既存F P D向け高コストパフォーマンス検査装置の市場投入と高機能フィルム・電子部品・燃料電池部材・自動車関係等のF P D向け以外の検査装置分野のさらなる販売拡大を行うべく、資源を傾注させてまいります。

加えて、既存事業における競争力の向上のための研究開発投資および設備投資、新規事業の開発のための投資など、攻めの施策を引き続き、重点的に行い、事業構造の改革と新たな成長路線の構築を果たしてまいります。

なお、当社グループでは2021年3月期を最終目標年度とし、売上高30,000百万円、営業利益3,000百万円を目指す中期経営計画「Innovation 68」を策定し、計画の推進を行ってまいりましたが、昨今の経営環境の変化、足元における業績および施策の進捗状況等を鑑み、施策内容等の再度見直しを行い、「Innovation 68」の目標とする経営成績目標を2023年3月期に達成すべく、中期経営計画の見直しを行うことといたしました。

有価証券報告書提出日現在、中期経営計画の見直し策定作業を行っておりますが、本年9月末を目途に計画をとりまとめ、あらためて当該計画をお知らせさせていただく予定です。

⑤ 資本の財源及び資金の流動性についての分析

a. 資金の流動性についての分析

当社グループの当連結会計年度の資金状況は、営業活動によるキャッシュ・フローでは、前連結会計年度と比較して122百万円減少の1,149百万円のキャッシュ・イン・フローとなっております。これは主に、たな卸資産の増減額が前連結会計年度の1,607百万円の増加から当連結会計年度は44百万円の減少と1,652百万円減少したことにより収入増となり、未収消費税の還付等により営業活動によるキャッシュ・フローのその他が前連結会計年度の351百万円の減少から当連結会計年度は404百万円の増加と756百万円増加したことにより収入増となった一方、売上債権の増加額が前連結会計年度と比較して706百万円増加したことにより支出増となったこと、仕入債務の増減額が前連結会計年度の1,362百万円の増加から当連結会計年度は573百万円の減少と1,935百万円減少したことにより支出増となったこと等によるものであります。

投資活動によるキャッシュ・フローでは、前連結会計年度と比較して714百万円増加し、2,357百万円のキャッシュ・アウト・フローとなりました。これは主に、定期預金の預入と払戻にかかる収支が前連結会計年度と比較して279百万円の収入増となった一方、有形固定資産の取得による支出が前連結会計年度と比較して154百万円の増加となったこと、投資有価証券の取得による支出が892百万円増加したことにより支出増となったこと等によるものであります。

財務活動によるキャッシュ・フローでは、前連結会計年度と比較して200百万円増加し、390百万円のキャッシュ・アウト・フローとなりました。これは主に、長期借入れによる収入が前連結会計年度と比較して200百万円減少したことにより収入減となったこと等によるものであります。

b. 資本の源泉についての分析

当社グループの資金需要のうち主なものは、製品製造のための材料・部品の購入のほか、製造に係る労務費・経費、販売費及び一般管理費等の営業費用によるものおよび売上債権・仕掛品等の運転資金であります。検査計測機器事業は当社グループにおける他の事業分野と比較して運転資金の回収期間が長期にわたります。そのため、今後、売上高の成長が見られた場合、運転資金もそれに応じて増加していくことが見込まれます。

また、コストダウンをさらに推進するため、製造ラインの合理化にかかるロボット等の製造設備投資に資金を投じていく予定であります。

さらに、製品・サービスの競争力を向上させていくために、今後積極的かつ継続的に研究開発活動を行っていく必要があると認識しており、研究開発の推進に係る費用も当社グループの重要な資金需要先であると考えている他、経営戦略上必要な提携・M&A等にかかる費用等も重要な資金需要先であると考えております。

当社グループの財務状態としては、当連結会計年度末における流動比率は298.6%、固定比率は48.7%、また、自己資本比率は76.2%であり比較的健全な財務状態であると認識しております。現在、運転資金および設備投資資金につきましては、基本的に内部資金より賄う予定であります。

4 【経営上の重要な契約等】

当社は、2018年6月18日に株式会社トプコンおよび株式会社トプコンの子会社である株式会社トプコンテクノハウスとの間で、半導体ウェーハ表面検査装置事業およびプロキシミティ露光装置事業の事業譲渡契約を締結し、2018年7月31日に同契約に基づき、株式会社トプコンおよび株式会社トプコンテクノハウスより当該事業を譲り受けました。

詳細は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (企業結合等関係)」に記載のとおりであります。

5 【研究開発活動】

当社グループの研究開発活動は「お客様に習う」をモットーとし、開発時からの総合的なコストダウンならびに環境への配慮を主眼に開発活動を進めております。

当連結会計年度における各セグメント別の主要テーマ、研究成果および研究開発費は次のとおりであります。なお、研究開発費については、各セグメントに配分できない基礎研究費用66百万円が含まれており、当連結会計年度の研究開発費の総額は763百万円となっております。

(1) 住生活関連機器事業

当連結会計年度における住生活関連機器事業の研究開発費用は106百万円となっており、内容につきましては下記のとおりであります。

① オフィス用椅子

オフィス用椅子の研究開発は、当社ファニチャー部門開発部が担当しており、「オフィスの生産性向上」を基本コンセプトに、新しい機能の考案、新素材の採用、加工技術の開発に取り組むとともに、製品の環境影響に留意した開発を行っております。当連結会計年度における主要テーマは、新型事務用回転椅子に使用するための素材・部材開発および新規企画等にかかわる研究開発等であり、継続開発中であります。

② 福祉・医療施設用椅子

福祉・医療施設用椅子の研究開発は、主に当社ファニチャー部門開発部およびヘルスケア部門開発課が担当しており、移乗・移動・シーティングを助け、高齢者・障害者の自立した生活を可能とする製品および医療関連機器の研究・開発を行っております。当連結会計年度における主要テーマは、医療・診療空間向け新型診療・処置台等の開発であり、開発を終了させ、製品の上市を行いました。

(2) 検査計測機器事業

検査計測機器事業の研究開発は、当社画像計測部門開発部が担当しております。当部門では開発リスクや開発効率を考慮し、優秀な先端技術を有する大学等を積極的に活用することにより、委託研究や共同開発を進め、その成果を取り込んでおります。当連結会計年度における主要テーマは、半導体向け検査装置への搭載を目的とした次期高精度高速イメージセンサー開発、次世代半導体向け検査装置および新用途向けレーザー加工機開発等であり、継続開発中であります。なお、当連結会計年度における研究開発費用は590百万円となっております。

(3) 産業機器事業

産業機器事業の研究開発は、当社産業機器部門が担当しております。当部門においても検査計測機器事業と同様に開発リスクや開発効率を考慮し、優秀な先端技術を有する大学等を積極的に活用することにより、委託研究や共同開発を進め、その成果を取り込んでおります。当連結会計年度における主要テーマは、流体制御機器用アクチュエータ開発、超精密加工技術に係る研究開発であり、それぞれ継続研究・開発中であります。なお、当連結会計年度における研究開発費用は0百万円となっております。

(4) エクステリア事業

当セグメントにおいては研究開発活動を行っておりません。

(5) 機械・工具事業

当セグメントにおいては研究開発活動を行っておりません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、生産設備の合理化等を中心に1,258百万円の設備投資を実施しました。

当連結会計年度の設備投資（有形固定資産、無形固定資産）の内訳は次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度
住生活関連機器	700百万円
検査計測機器	408
産業機器	132
エクステリア	19
機械・工具	1
小計	1,263
消去又は全社	△4
合計	1,258

住生活関連機器事業においては、主に伊那工場排水処理施設の新設82百万円、オフィス家具製造工場の表面処理設備および工場耐震工事122百万円の投資を実施しました。

全社においては、主に横浜技術開発センター建設工事289百万円の投資を実施しました。

なお、当連結会計年度において重要な影響を及ぼす設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

主要な設備の内容は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)	
			建物及び構 築物 (百万円)	機械装置 及び運搬 具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース 資産 (百万円)	その他 (百万円)		合計 (百万円)
伊那工場 (長野県伊那市)	住生活関連機器	オフィス家具製造設備、健康福祉関連機器製造設備	1,276	571	345 (29,847)	126	95	2,415	110 [23]
下島工場 (長野県伊那市)	住生活関連機器	オフィス家具製造設備	164	141	278 (25,141)	20	4	609	69 [18]
宮田工場 (長野県上伊那郡宮田村)	産業機器	産業機器製品	267	271	187 (22,773)	8	47	782	32 [40]
南平工場 (長野県上伊那郡宮田村)	検査計測機器	検査計測装置製品製造設備	222	58	221 (36,199)	9	77	589	116 [5]
馬住工場 (長野県駒ヶ根市)	エクステリア	エクステリア製品製造設備	108	1	165 (43,276)	—	21	296	21 [10]
本社 (長野県上伊那郡宮田村)	全社（共通）	統括業務施設	189	0	583 (43,309)	28	157	958	37 [5]
東京営業所 (東京都千代田区)	検査計測機器 産業機器 エクステリア	販売業務施設	178	—	2,277 (175)	—	4	2,460	44 [—]

(2) 国内子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)	
				建物及び建 築物 (百万円)	機械装置及び 運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース 資産 (百万円)	その他 (百万円)		合計 (百万円)
(株)ニッコー	(長野県上 伊那郡宮田 村)	機械・ 工具	販売業務施 設	311	0	60 (4,976)	7	9	388	13 [9]

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品、建設仮勘定、無形固定資産（リース資産を除く）であります。なお金額には消費税等は含んでおりません。
2. 従業員数の [] は、臨時従業員を外書しております。
3. 現在休止中の主要な設備はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度後1年間の設備投資計画（新設・拡充）は、2,631百万円であり、セグメントごとの内訳は次のとおりであります。

2019年3月31日現在

セグメントの名称	2019年3月末計画金額 (百万円)	設備等の主な内容・目的	資金調達方法
住生活関連機器	319	合理化、省力化のための機械及び装置等。	自己資金および ファイナンス・ リース
検査計測機器	460	受注獲得のためのデモンストレーション用機械及び装置ならびに工具器具及び備品等。	同上
産業機器	302	合理化、省力化、信頼性向上のための機械及び装置等。	同上
エクステリア	119	同上	同上
小計	1,201		
全社（共通）	1,430	横浜技術開発センター（研究開発施設および事務所）、社内システム更新のための工具器具備品ならびに無形固定資産等。	自己資金および ファイナンス・ リース
合計	2,631		

- (注) 1. 金額には消費税等を含めておりません。
2. 経常的な設備の更新のための除売却を除き、重要な設備の除売却の計画はありません。
3. 各セグメントの計画概要は、次のとおりであります。
- 住生活関連機器は、オフィス家具製造設備投資287百万円、健康福祉関連機器製造設備投資31百万円であります。
- 検査計測機器は、評価用検査計測装置231百万円、その他228百万円であります。
- 産業機器は電磁アクチュエータ製造関連投資228百万円、ばね製品製造設備投資73百万円であります。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	50,000,000
計	50,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年6月27日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	15,721,000	15,721,000	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数 100株
計	15,721,000	15,721,000	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数(千株)	発行済株式総数残高(千株)	資本金増減額(千円)	資本金残高(千円)	資本準備金増減額(千円)	資本準備金残高(千円)
1997年2月17日	200	15,721	216,000	2,015,900	216,000	2,157,140

(注) 有償一般募集

発行済株式数 200千株

発行価格 2,160円

資本組入額 1,080円

(5)【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	11	19	80	56	4	5,290	5,460	—
所有株式数(単元)	—	28,471	1,405	53,146	6,822	4	67,344	157,192	1,800
所有株式数の割合(%)	—	18.11	0.89	33.81	4.34	0.00	42.84	100.00	—

(注) 自己株式524,811株は、「個人その他」に5,248単元及び「単元未満株式の状況」に11株を含めて記載しております。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
コクヨ株式会社	大阪市東成区大今里南6丁目1-1	2,151.5	14.15
日本発条株式会社	横浜市金沢区福浦3丁目10	2,151.5	14.15
堀井 朝運	長野県上伊那郡宮田村	1,487.4	9.78
株式会社鷹山	長野県上伊那郡宮田村231	955.7	6.28
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社	東京都中央区晴海1丁目8-11	730.5	4.80
日本マスタートラスト信託銀行株式 会社	東京都港区浜松町2丁目11-3	683.6	4.49
鷹野 力	長野県上伊那郡宮田村	394.8	2.59
鷹野 準	長野県上伊那郡宮田村	358.7	2.36
一般財団法人鷹野学術振興財団	長野県上伊那郡宮田村137	330.0	2.17
株式会社八十二銀行	長野県長野市大字中御所字岡田178番地 8	283.9	1.86
計	—	9,527.6	62.69

- (注) 1. 当社は、自己株式を524,811株保有しておりますが、上記大株主からは除外しております。
2. 日本発条株式会社の持株数には、同社が退職給付信託の信託財産として拠出している当社株式1,000.0千株(発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合6.58%)を含んでおります(株主名簿上の名義は「みずほ信託銀行株式会社退職給付信託日本発条口再信託受託者資産管理サービス信託銀行株式会社」であります。)
3. 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社の所有株式数のうち、697千株は信託業務に係るものであります。
4. 日本マスタートラスト信託銀行株式会社の所有株式数はすべて信託業務に係るものであります。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 524,800	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 15,194,400	151,944	—
単元未満株式	普通株式 1,800	—	—
発行済株式総数	15,721,000	—	—
総株主の議決権	—	151,944	—

② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数 (株)	他人名義所有株式数 (株)	所有株式数の合計 (株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合 (%)
タカノ株式会社	長野県上伊那郡宮田村137番地	524,800	—	524,800	3.33
計	—	524,800	—	524,800	3.33

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 普通株式

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式数	524,811	—	524,811	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は株主に対する利益還元が経営上の重要政策であると考え、より安定した経営基盤の確立と自己資本利益率の向上を図ると同時に、業績の進捗状況、配当性向等を勘案しながら長期安定した利益の還元を行っていくことを基本方針としております。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本的な方針としておりますが、中間配当の実施に関しては業績の進捗の状況に応じてこれを随時決定するものとしたいと存じます。

これらの剰余金の配当の決定機関は、中間配当、期末配当ともに取締役会であります。

当事業年度の配当につきましては、上記基本方針等に基づき、当事業年度の業績進捗を鑑み、前事業年度比2円増配の1株当たり16円の配当といたしました。

なお、内部留保資金につきましては、経営基盤の拡充、競争力の強化を図るため、新製品開発投資や合理化推進のための投資・事業提携および新規事業開発のための投資など、有効に活用してまいりたいと存じます。

当社は、「会社法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議をもって剰余金の配当等を行うことができる」旨定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)
2019年5月17日 取締役会決議	243,139	16

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、企業競争力強化を実現するための迅速な経営意思決定および経営の透明性確保のための経営チェック機能拡充の両立を図ることを経営の重要課題として認識しております。このような視点に立ち、経営管理組織の整備を行っているほか、経営の透明性確保の観点から、タイムリーディスクロージャーを重視するとともに、継続的なIR活動に努めております。

また、企業を取り巻く環境の急速な変化に対応するとともに、各ステークホルダーにとっての企業価値を向上させるべく、リスク管理・コンプライアンスを含めたコーポレートガバナンスの強化に努めてまいります。

② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

a. 企業統治の体制の概要

当社は、2016年6月29日開催の第63期定時株主総会において定款の変更が決議されたことにより、監査役会設置会社から監査等委員会設置会社に移行しております。これは、構成員の過半数を社外取締役が占める監査等委員会を設置し、監査等委員である取締役が取締役会において議決権を行使することを通じて、取締役会の監督機能を一層強化し、コーポレート・ガバナンス体制のさらなる充実を図ることを目的としたものであります。

この移行により、当社は取締役会および監査等委員会を設置し、有価証券報告書提出日現在において、取締役15名（うち監査等委員3名）を選任しております。また、取締役のうち3名が社外取締役であります。

監査等委員会は常勤の監査等委員である取締役1名（戸枝茂夫）、非常勤の監査等委員である取締役（社外取締役）2名（長谷川洋二、小澤輝彦）の3名で構成されております。定期的に監査等委員会を開催し、取締役に対する職務の執行の妥当性・適法性監査を行うほか、個々の監査等委員は、取締役会における議決権の行使を通じて、より高い次元で、取締役の職務の執行の監督を図ることを目指しております。

当社は、迅速かつ効率的な業務執行を目的に、常勤の業務執行取締役、常勤監査等委員である取締役および執行役員で構成される経営会議を設置しております。有価証券報告書提出日現在において、その構成員は、議長代表取締役社長鷹野準、その他、常勤の業務執行取締役（鷹野力、小田切章、大原明夫、久留島馨、臼井俊行、玉木昭男、下島久志、植田康弘）、常勤監査等委員である取締役（戸枝茂夫）および執行役員（浦野孝志、橋爪岳郎、山本幸康、宇田隆）であります。

経営会議は経営会議規程の定めに従い、取締役会付議事項の立案を行うほか、経営上の重要事項の審議、決定を行っております。

b. 当該体制を採用する理由

当社は、企業競争力強化を実現するための迅速な経営意思決定および経営の透明性確保のための経営チェック機能拡充の両立を図ることを経営の重要課題として認識しております。この課題に対して、中立かつ客観的な立場からの経営の監視を強化するため、社外取締役を含む監査等委員会を設置し、取締役の職務の執行の監督を図るとともに、各事業部門を管掌等する業務執行取締役が取締役会メンバーとなることにより、迅速な意思決定を行い、かつ、他の事業部門を管掌する業務執行取締役および代表取締役の業務執行状況を相互監督する体制を敷くことで、経営の効率化と経営に対する監督を両立できるものと考え、現状の企業統治の体制を採用しているものであります。

③ 企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備の状況

当社は、取締役の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制その他会社の業務の適正を確保するための体制（内部統制システム構築に関する基本方針）について、2016年6月29日開催の取締役会において、以下の内容を決議しております。この基本方針に基づき内部統制システムを整備してまいります。

・取締役の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制

取締役が法令および定款に適合し、また、社会通念に則った倫理や企業の社会的責任に順じた行動をとるための行動規範等の規程を定め、それを周知徹底させる。

取締役に対し、コンプライアンスに関する研修・教育を行い、コンプライアンス意識の醸成を図る。

・取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

取締役の重要な意思決定および報告など取締役の職務執行に関しては、文書の作成、保存および管理に係る文書管理規程を策定する。

・損失の危険の管理に関する規程その他の体制

リスク管理を担当する取締役および部署を定める。リスク・コンプライアンスに関しては常勤取締役を構成員とする経営会議にて審議を行う。また、リスク管理に関する基本的な方針等を含むリスク管理の基本事項を定めた規程を制定する。

各事業部門におけるリスクの管理を行うべく、各事業部門長は定期的にリスク管理状況に関して取締役会に報告を行う。

・取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

重要事項について、慎重かつ迅速な意思決定を図るための常勤取締役を構成員とする経営会議を設置し、運用する。

組織の効率的かつ適正な運用を図る目的をもって、決裁基準、職務権限、職務分掌および組織に関する規程を定め、運用する。

・使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制

使用人が法令および定款に適合し、また、社会通念に則った倫理や企業の社会的責任に順じた行動をとるための行動規範等の規程を定め、それを全使用人に周知徹底させる。

リスク・コンプライアンスに関しては常勤取締役を構成員とする経営会議にて審議を行う。また、コンプライアンスを担当する取締役および部署を定め、コンプライアンスに関するプログラムを実施する。

使用人に対し、コンプライアンスに関する研修・教育を行い、コンプライアンス意識の醸成を図る。

・会社ならびにその親会社および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

子会社等のコンプライアンス・リスク管理体制、子会社等管理の担当部署、子会社等の統治に関する事項等に関して定めた管理規程を定める。

・監査等委員会の職務を補助すべき取締役および使用人に関する事項、当該取締役および使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く）からの独立性に関する事項、当該取締役および使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項

監査等委員会より要求がある場合、監査等委員会を補助すべき必要な使用人を配置する。

監査等委員会を補助すべき使用人を配置した場合において、当該使用人に関する人事異動、人事評価、懲戒に関しては、事前に監査等委員会の同意を得るものとする。

・当社および子会社の取締役および使用人等が監査等委員会に報告するための体制、その他の監査等委員会への報告に関する体制、報告したことを理由にして不利な取り扱いを受けないことを確保するための体制

当社の取締役および使用人ならびに当社の子会社の取締役、監査役および使用人は、会社に重大な損失を与える事項が発生し、または発生する恐れがあるとき、法令、定款、社会通念に則った企業倫理に違反する行為およびその恐れがあるとき、その他監査等委員会が報告すべきものとして認めた事項が生じたときは、当社の監査等委員会に報告を行うものとする。

なお、当社および当社の子会社は、以上の監査等委員会への報告を理由とした報告者への不利益な処遇は一切行わない。

監査等委員会は取締役会および経営会議に出席することができるものとする他、いつでも取締役会および経営会議の議事録を閲覧することができ、決議事項および報告事項の内容を確認することができるものとする。

代表取締役は監査等委員会との定期的な意見交換の機会を持つものとする。

・監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項

監査等委員が必要と認めるときは、監査等委員会は監査等委員の監査を支える弁護士、公認会計士、コンサルタントその他のアドバイザーを会社の費用負担で任用することができる。

・その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

取締役および使用人の監査等委員監査に対する理解を深め、監査等委員監査の環境を整備するよう努める。

b. リスク管理体制の整備の状況

当社では、リスク管理・コンプライアンス等の強化を図るべく、各種経営リスクを有効に管理する目的をもって、常勤取締役を構成員とする経営会議にて、リスク・コンプライアンス上の問題を審議しております。なお、取締役会においてもリスク管理に関する議論がなされているほか、各業務執行取締役のもと日常的な社員教育や意識の喚起を図っております。また、顧問弁護士と契約を締結しており、法務問題にかかわる事象について助言と指導を受けられる体制を整備しております。

c. 責任限定契約の内容

当社と取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、会社法第427条第1項に規定する最低責任限度額であります。なお、当該責任限定が認められるのは、当該取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失がないときに限られます。

d. 取締役の定数

当社の取締役（監査等委員を除く）は14名以内とする旨および監査等委員である取締役は4名以内とする旨を定款に定めております。

e. 取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、監査等委員である取締役とそれ以外の取締役を区別して、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行い、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

f. 剰余金の配当等の機関決定

当社は、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨定款に定めております。これは、剰余金の配当等に関する権限を取締役に付与することにより、機動的な資本政策および配当政策を図ることを目的とするものであります。

g. 取締役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の行為に関する取締役（取締役であった者を含む。）の責任を法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

h. 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性15名 女性一名 (役員のうち女性の比率-%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役社長 経営全般	鷹野 準	1949年1月7日生	1971年4月 日発販売(株)入社 1974年3月 当社入社 1978年8月 当社取締役就任 1982年9月 当社常務取締役就任 1985年9月 当社専務取締役就任 1990年8月 (株)ニッコー代表取締役社長就任(現任) 1997年4月 タカノ機械(株)代表取締役社長就任(現任) 1998年6月 当社代表取締役社長就任(現任)	(注)5	358.7
専務取締役 社長補佐 TQM推進室管掌	鷹野 力	1951年12月3日生	1977年4月 (株)牧野フライス製作所入社 1980年1月 当社入社 1990年7月 当社家具事業部開発部長 1990年9月 当社取締役就任 1994年6月 当社家具開発部長 1996年6月 当社常務取締役就任 2010年1月 上海鷹野商貿有限公司董事長就任(現任) 2015年6月 当社専務取締役就任(現任)	(注)5	394.8
常務取締役 技術開発室管掌	小田切 章	1947年9月10日生	1973年4月 (株)三協精機製作所(現日本電産サンキョー(株))入社 1986年9月 当社入社 1997年4月 当社メカトロ部長 1997年6月 当社取締役就任 2006年6月 当社常務取締役就任(現任)	(注)5	17.9
常務取締役 経営企画本部(企画室・経理部・グローバル調達統括グループ・事業化グループ)、人事部、アグリ事業推進室管掌	大原 明夫	1948年3月23日生	1971年4月 (株)日本興業銀行(現(株)みずほフィナンシャルグループ)入行 2001年8月 当社入社、当社企画室長 2003年7月 当社経理部長 2005年6月 当社取締役就任 2007年6月 当社常務取締役就任(現任)	(注)5	7.0
取締役 画像計測部門、メディカル事業推進室管掌	久留島 馨	1956年3月12日生	1979年4月 日発販売(株)入社 1990年9月 当社入社、営業開発部主査 1994年6月 当社営業開発部画像計測グループ営業課長 1996年1月 当社営業開発本部(現画像計測部門)画像営業部長 2006年6月 当社取締役就任(現任) 2013年8月 台湾鷹野股份有限公司董事長就任(現任)	(注)5	10.3
取締役 ネットワーク部管掌	臼井 俊行	1954年2月28日生	1976年4月 (株)八十二銀行入行 2006年6月 同行執行役員就任 2007年6月 当社取締役就任(現任)	(注)5	6.8
取締役 産業機器部門、エクステリア部門管掌	玉木 昭男	1955年10月27日生	1978年4月 当社入社 1997年3月 当社産業機器部長 2011年8月 香港鷹野国際有限公司董事長就任(現任) 2012年4月 当社執行役員就任 2014年6月 当社取締役就任(現任)	(注)5	6.2

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 ファニチャー部門管掌	下島 久志	1960年10月1日生	1984年4月 当社入社 2006年7月 当社エレクトロニクス部門産業機器部（現産業機器部門）部長 2009年7月 家具部門（現ファニチャー部門）管理部長（現任） 2012年4月 当社執行役員就任 ファニチャー&ヘルスケア部門副部門長 2016年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 5	3.1
取締役 ヘルスケア部門管掌	植田 康弘	1957年2月18日生	1980年4月 オリンパス光学工業(株)（現オリンパス(株)）入社 2006年6月 同社執行役員就任 2009年8月 ベックマン・コールター・バイオメディカル(株)代表取締役就任 2011年1月 ベックマン・コールター(株)取締役就任 2013年11月 ビー・ブラウンエースクラブ(株)執行役員就任 2016年11月 当社入社、執行役員就任 2017年4月 当社上席執行役員就任、ヘルスケア部門副部門長 2017年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 5	0.5
取締役	黒田 康裕	1952年7月6日生	1975年4月 コクヨ(株)入社 1991年6月 同社取締役就任 1993年6月 同社常務取締役就任 1995年6月 同社専務取締役就任 2009年3月 同社代表取締役専務就任 2010年3月 同社代表取締役副社長就任 2011年3月 同社代表取締役、副社長執行役員就任 2015年3月 同社取締役副会長就任（現任） 2018年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 5	—
取締役	貫名 清彦	1957年6月10日生	1980年4月 日本発条(株)入社 2011年6月 同社執行役員就任 2014年4月 同社シート生産本部長 2015年4月 同社常務執行役員就任 2018年4月 同社専務執行役員就任（現任） 2019年6月 同社取締役就任（現任） 2019年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 5	—
取締役	鈴木 浩	1942年5月27日生	1966年4月 (株)日本興業銀行（現(株)みずほフィナンシャルグループ）入行 1994年6月 同行取締役就任 1995年5月 興銀証券(株)（現みずほ証券(株)）常務取締役就任 1997年6月 (株)日本興業銀行（現(株)みずほフィナンシャルグループ）常務取締役就任 2001年6月 富士重工(株)（現(株)SUBARU）取締役専務執行役員就任 2004年6月 同社代表取締役副社長就任 2007年6月 (株)日本航空監査役就任 2019年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 5	—

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (監査等委員)	戸枝 茂夫	1947年5月7日生	1970年3月 当社入社 1993年5月 (株)ニッコー監査役就任(現任) 1997年4月 タカノ機械(株)監査役就任(現任) 1997年8月 当社経理部部長 2003年6月 当社常勤監査役就任 2016年6月 当社取締役(監査等委員)就任(現任)	(注)6	15.6
取締役 (監査等委員)	長谷川 洋二	1952年12月9日生	1979年3月 司法研修所卒業 1979年4月 弁護士登録 2003年6月 当社監査役就任 2016年6月 当社取締役(監査等委員)就任(現任)	(注)6	—
取締役 (監査等委員)	小澤 輝彦	1947年5月12日生	1970年4月 (株)八十二銀行入行 2001年6月 同行常勤監査役就任 2006年6月 アルプス証券(株)(現八十二証券(株))代表取締役社長就任 2011年6月 八十二証券(株)取締役相談役就任 2011年6月 当社監査役就任 2016年6月 当社取締役(監査等委員)就任(現任)	(注)6	—
計					820.9

- (注) 1. 取締役鈴木浩、長谷川洋二および小澤輝彦は、社外取締役であります。
2. 取締役黒田康裕および貴名清彦は、業務執行を行わない取締役であります。
3. 当社の監査等委員会の体制は次のとおりであります。
委員長 戸枝茂夫、委員 長谷川洋二、委員 小澤輝彦
4. 専務取締役鷹野力は代表取締役社長鷹野準の実弟であります。
5. 2019年6月27日開催の定時株主総会の終結のときから1年間
6. 2018年6月28日開催の定時株主総会の終結のときから2年間

② 社外役員の状況

当社は社外取締役として、鈴木浩氏、長谷川洋二氏および小澤輝彦氏の3名を選任しており、そのうち長谷川洋二氏および小澤輝彦氏は監査等委員であります。

a. 社外取締役と当社との人的・資金的・取引関係その他の利害関係

社外取締役鈴木浩氏と当社の間には特別な利害関係はありません。

社外取締役長谷川洋二氏は、弁護士法人長谷川洋二法律事務所の代表社員を兼務しており、当社は同法人と法律顧問契約を締結し、当社は同氏に法律顧問としての報酬を継続的に支払っておりますが、同氏は、当社と委託契約を受けたものとして当社の利益の最大化のために法律面からの客観的な意見を述べております。また、当社が支払っている報酬額は、僅少であり、かつ、同事務所が受領する報酬総額に占める割合も僅少であることから、当社の社外取締役としての職務遂行に影響を与えるものでなく、同氏の独立性は十分確保されているものと認識しております。

また、社外取締役長谷川洋二氏は、株式会社キョウデン、ルビコンホールディングス株式会社およびルビコン株式会社の社外取締役であります。当社とそれら兼職先との間には特別な利害関係はありません。

社外取締役小澤輝彦氏と当社の間には特別な利害関係はありません。

b. 社外取締役が当社の企業統治において果たす機能および役割ならびに選任状況

社外取締役鈴木浩氏は、金融機関、製造メーカー等多様な上場企業での経営に携わってきた経験に基づく企業経営全般にわたる高い見識をもとに当社の様々な経営判断におけるアドバイスを頂くことができる人材であり、社外取締役として適任であります。また、当社では同氏は一般株主との間に利益相反が生ずるおそれはない者と判断し、株式会社東京証券取引所が定める独立役員に指定しております。

社外取締役長谷川洋二氏は、高度な法律面の知見に基づく、内部統制システムの構築・運用状況の監視および検証能力の発揮と様々な経営判断にあたっての高度な法律面からのアドバイスをいただくことができる人材であり、監査等委員である取締役に適任であります。また、当社では同氏は一般株主との間に利益相反が生ずるおそれはない者と判断し、株式会社東京証券取引所が定める独立役員に指定しております。

社外取締役小澤輝彦氏は、金融機関における経営に携わってきた経験に基づく、内部統制システムの構築・運用状況の監視および検証能力の発揮と様々な経営判断にあたっての金融リスク・信用リスク等に関するアドバイスをいただくことができる人材であり、監査等委員である取締役に適任であります。また、当社では同氏は一般株主との間に利益相反が生ずるおそれはない者と判断し、株式会社東京証券取引所が定める独立役員に指定しております。

c. 社外取締役の独立性に関する当社の考え方

当社は、ガバナンスの客観性および透明性を確保するために、社外役員の独立性に関する基準を以下のとおり定めております。

当社は、社外役員または社外役員候補者が、当社において合理的に可能な範囲で調査した結果、次の各項目のいずれにも該当しないと判断される場合に、独立性を有していると判断いたします。

1. 当社および当社の子会社（以下、「当社グループ」と総称する）の業務執行者（注1）または過去10年間に於いて当社グループの業務執行者であった者
 2. 当社グループを主要な取引先とする者（注2）またはその業務執行者
 3. 当社グループの主要な取引先（注3）またはその業務執行者
 4. 当社グループから役員報酬以外に多額の金銭その他の財産（注4）を得ているコンサルタント、弁護士、公認会計士等の専門的なサービスを提供する者（当該財産を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、当該団体に所属する者）
 5. 当社グループから多額の寄付（注5）を受けている者（当該財産を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、当該団体の業務執行者）
 6. 当社グループの法定監査を行う監査法人の社員等として当社の監査業務を担当する者
 7. 当社グループの主要な借入先（注6）である金融機関の業務執行者
 8. 当社の主要株主（注7）または当該主要株主が法人である場合には当該法人の業務執行者
 9. 当社グループが主要株主である法人の業務執行者
 10. 上記2から9のいずれかに過去3年間に於いて該当していたもの
 11. 上記1から9に該当する者が重要な者（注8）である場合において、その者の配偶者または二親等内の親族
注1 「業務執行者」とは、法人その他の団体の業務執行取締役、執行役、執行役員、その他これらに準ずるものおよび使用人をいう。
- 注2 「当社グループを主要な取引先とする者」とは、直近連結会計年度における当社グループの年間連結売上高の2%以上の額の支払いを当社グループから受けた者をいう。
- 注3 「当社グループの主要な取引先」とは、直近連結会計年度における当社グループの年間連結売上高の2%以上の額の支払いを当社グループに行っている者をいう。
- 注4 「多額の金銭その他の財産」とは、直近事業年度を含めた過去3事業年度の平均で年間1,000万円を超える額をいう。
- 注5 「多額の寄付」とは直近事業年度を含めた過去3事業年度の平均で年間1,000万円を超える額の寄付をいう。
- 注6 「主要な借入先」とは直近事業年度末における当社グループの借入残高が当社グループの連結総資産の3%を超える借入先をいう。
- 注7 「主要株主」とは、総議決権の10%以上の議決権を直接または間接的に保有している者をいう。
- 注8 「重要な者」とは、取締役（社外取締役を除く）、監査役（社外監査役を除く）、執行役員および部長格以上の上級管理職にある使用人をいう。

③ 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は取締役会および監査等委員会に出席し、議案の審議などに必要な発言などを適宜行うこととしております。

社外取締役と内部監査部門の関係においては、常勤監査等委員を通じて、間接的ながら「②内部監査および監査等委員会監査の状況」に記載の連携を行うこととしております。

社外取締役と会計監査人との関係においては、監査等委員会に必要に応じて会計監査人が招聘され、相互に必要な情報交換を行うこととしております。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

当社は監査等委員会設置会社制度を採用しており、監査等委員3名（うち非常勤の社外取締役2名）の体制で監査等委員会を運営しております。常勤監査等委員を1名選定しており、常勤監査等委員は取締役会、経営会議などの重要な会議に積極的に出席するなど監査の充実を図り、取締役の業務執行を十分に監視できる体制となっております。

また、常勤監査等委員は当社の経理部に1985年9月から2003年6月まで在籍し、通算18年にわたり決算手続ならびに財務諸表等の作成に従事しており、財務および会計に関する相当程度の知見を有しております。

なお、監査等委員会の補助を行う専任部署、専任スタッフは設置していないものの、監査等委員会より要請ある場合は監査等委員会を補助すべき必要な人員を配置することとしております。

当事業年度において、監査等委員会12回開催しており、各監査等委員はそのすべてに出席しております。

② 内部監査の状況

当社では、他の部門から独立した立場で組織内部管理の体制の適正性および業務の効率性評価を行うとともに、管理体制および業務の改善を図る目的をもった内部監査室を設置しております。内部監査室の人員は内部監査室長1名および監査スタッフ1名の計2名の体制であり、内部監査室は社内規程である内部監査規程に基づき、適法で効率的な業務執行を確保すべく、社内の各部署に対して定期的に必要な監査を行い、代表者への報告を実施しております。また、財務報告に係る内部統制の評価業務も実施しております。

常勤監査等委員、内部監査室長は日常、必要な意見交換を行い、監査の品質の向上に努めているなど、緊密な連携を取っているほか、監査等委員会は効率的な監査等委員会監査の実施を行うため、内部監査室の運営方針、業務実施状況、監査報告を閲覧できるとともに、相互に監査調書等情報の共有を行っております。また、監査等委員会は、必要に応じて内部監査室に調査を依頼することができるものとしております。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 業務を執行した公認会計士

杉田 昌則

藤野 竜男

c. 監査業務に係る補助者の構成

当事業年度において、当社の会計監査業務に係る補助者は公認会計士2名、その他2名でありました。

d. 監査法人の選定方針と理由

監査法人の選定方針としましては、当社の規模及び事業内容を踏まえ、当社の会計監査を行うに足る能力ならびに専門性を有する監査法人を選定することとしております。

当社監査等委員会は、監査公認会計士等の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人（監査公認会計士等）の解任または不再任に関する議案の内容を決定いたします。

また、監査等委員会は、会計監査人（監査公認会計士等）が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査等委員全員の同意に基づき、会計監査人（監査公認会計士等）を解任いたします。この場合、監査等委員会が選定した監査等委員は、解任の最初に招集される株主総会におきまして、会計監査人（監査公認会計士等）を解任した旨と解任の理由を報告いたします。

e. 監査等委員会による監査法人の評価

当社の監査等委員会は、監査法人に対して評価を行っております。この評価については、監査法人が独立の立場を保持し、かつ、適正に監査を実施しているかという観点で行っており、監査計画の説明とその協議、監査法人の職務の遂行状況および監査結果の報告と意見交換により、評価をしております。

また、監査法人から職務の遂行が適正に行われることを確保するための体制が整備できていることについての通知をうけることにより、これらの評価を下しております。

④ 監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	27	—	29	—
連結子会社	—	—	—	—
計	27	—	29	—

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに属する組織に対する報酬

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方法

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針としましては、事前に見積書の提示を受け、監査日数、監査内容及び当社の規模等を総合的に勘案し、監査等委員会の同意を得た後に決定することとしております。

e. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社監査等委員会では、監査公認会計士等より、監査計画について説明を受けるとともに、監査報酬について、その水準を他社との比較において検討を行う等により、監査公認会計士の報酬の妥当性を検討した結果、その報酬について相当であると判断し、監査公認会計士等の報酬等に同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、役員の報酬等の額の決定においては、株主総会の決議による取締役（監査等委員である取締役を除く）及び監査等委員である取締役それぞれの報酬総額の限度内で、会社の業績や経営内容、経済情勢等のほか、中長期の目標に対する業務の執行状況等を総合的に勘案して作成するという方針に基づき、代表取締役社長が各取締役の報酬原案を作成し、当該案を取締役（監査等委員である取締役を除く）については、取締役会、監査等委員である取締役については監査等委員会で審議し、決定しております。

かかる決定過程によりまして、役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の決定権限を有するものは代表取締役社長鷹野準であり、その権限の内容及び裁量の範囲は役員報酬の原案作成を行うという権限範囲であります。

なお、当社では業績連動報酬は採用していません。

当社の役員の報酬等に関する株主総会の決議年月日は2016年6月29日であり、決議の内容は、以下のとおりであります。

- ・取締役（監査等委員である取締役を除く）については役員賞与金を含め年額300百万円以内
- ・監査等委員である取締役については、役員賞与金を含め35百万円以内

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額（千円）		対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	役員賞与引当金 繰入額	
取締役（監査等委員および社外 取締役を除く。）	248,147	233,439	14,708	12
取締役（監査等委員） （社外取締役を除く。）	15,768	14,988	780	1
社外役員	7,800	7,200	600	2

（注）1. 役員ごとの報酬等の総額につきましては、1億円以上を支給している役員はおりませんので、記載を省略しております。

2. 取締役の報酬等の総額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。

(5) 【株式の保有状況】

①投資株式の区分の基準及び考え方

当社では、原則として専ら株式の価値の変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的とした純投資目的の株式は保有しないこととしております。また、当社では取引先及び当社本店所在地近隣の関連企業との関係維持・連携強化を図るため、また、当社の中長期的な企業価値向上に資すると認められる場合、純投資目的以外の目的の投資株式を保有する方針としております。

②保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法ならびに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社では、保有している純投資目的以外の目的である投資株式について、取締役会で、その保有理由およびその銘柄ごとの経営指標・投資指標等を定期的に評価を行い、その個別銘柄ごとの保有の適否に関して検証を行っております。当事業年度におきましては、それら検証の結果、2銘柄につきまして売却を行いました。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (千円)
非上場株式	12	51,083
非上場株式以外の株式	12	1,194,082

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	1	841	凸版印刷株式会社取引先持株会への拠出による ものであります。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (千円)
非上場株式	3	86,577
非上場株式以外の株式	2	4,667

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
キッセイ薬品工業(株)	151,120	151,120	近隣企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	有
	437,945	434,470		
(株)八十二銀行	530,564	530,564	取引金融機関との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	有
	243,528	302,421		
(株)ヤマウラ	179,500	179,500	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	有
	161,909	159,575		
コクヨ(株)	88,222	88,222	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	有
	143,272	184,648		
日本発条(株)	97,447	97,447	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	有
	96,862	109,627		
丸一鋼管(株)	11,165	11,165	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	有
	36,007	36,342		
(株)みずほフィナンシャルグループ	200,100	200,100	取引金融機関との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	無
	34,277	38,299		
凸版印刷(株)	7,498	14,029	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	無
	12,529	12,247		
(株)LIXILグループ	8,000	8,000	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	無
	11,824	19,008		
養命酒製造(株)	4,345	4,345	近隣企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	無
	9,263	10,397		
日本パワーファスニング(株)	23,478	23,478	関連業界動向等把握のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	無
	3,615	5,587		
大豊工業(株)	3,367	3,367	取引先企業との関係構築のための政策投資目的。(注) 2.をご参照ください。	無
	3,047	5,114		
マックス(株)	—	2,000	関連業界動向等把握のための政策投資目的。	無
	—	2,732		
第一生命ホールディングス(株)	—	1,000	取引保険会社との関係構築のための政策投資目的。	無
	—	1,942		

(注) 1. 「—」は当該銘柄を保有していないことを示しております。

2. 特定投資株式について、提出会社の経営方針・経営戦略等事業の内容及びセグメント情報と関連付けた定量的な保有効果の記載は困難であるため、保有の合理性を検証した方法について記載しております。保有の合理性を検証した方法は次のとおりであります。

「保有している特定投資株式について、取締役会で、その保有理由およびその銘柄ごとの経営指標・投資指標等を定期的に評価を行い、その個別銘柄ごとの保有の適否に関して検証を行っております。」

3. 凸版印刷(株)株式は、2018年10月1日を効力発生日として株式併合(2株を1株)を行っております。

みなし保有株式

当社では、みなし保有株式はありません。

③保有目的が純投資目的である投資株式

当社は純投資目的である投資株式は保有しておりません。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、連結財務諸表等を作成、開示できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。

また、必要に応じて、同法人の行う研修等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	10,776,402	9,168,714
受取手形及び売掛金	※1 8,361,910	※1 9,203,021
有価証券	100,000	30,216
商品及び製品	775,131	541,172
仕掛品	3,731,113	3,800,483
原材料及び貯蔵品	856,991	1,144,576
その他	434,128	149,388
貸倒引当金	△473	△75
流動資産合計	25,035,204	24,037,498
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	7,833,552	8,115,049
減価償却累計額	△4,982,839	△5,240,495
建物及び構築物（純額）	2,850,712	2,874,554
機械装置及び運搬具	4,739,214	5,069,780
減価償却累計額	△3,917,764	△4,037,002
機械装置及び運搬具（純額）	821,450	1,032,777
土地	4,250,044	4,250,044
リース資産	620,544	697,073
減価償却累計額	△297,986	△378,396
リース資産（純額）	322,558	318,676
その他	3,602,332	3,593,724
減価償却累計額	△2,843,557	△2,749,031
その他（純額）	758,775	844,692
有形固定資産合計	9,003,540	9,320,745
無形固定資産		
のれん	124,053	155,920
リース資産	18,835	11,252
その他	198,311	164,612
無形固定資産合計	341,200	331,784
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 2,617,596	※2 3,464,806
繰延税金資産	531,953	564,906
その他	512,960	511,530
貸倒引当金	△6,048	△6,198
投資その他の資産合計	3,656,461	4,535,045
固定資産合計	13,001,202	14,187,575
資産合計	38,036,406	38,225,073

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※1 1,986,512	※1 1,556,654
電子記録債務	※1 2,759,614	※1 2,607,843
リース債務	87,869	96,231
未払法人税等	369,738	286,608
前受金	1,271,062	1,592,990
賞与引当金	452,237	458,448
役員賞与引当金	24,972	17,660
その他	※1 1,475,105	※1 1,433,633
流動負債合計	8,427,112	8,050,071
固定負債		
長期借入金	246,560	166,480
リース債務	195,416	191,211
退職給付に係る負債	522,922	504,039
その他	191,340	191,332
固定負債合計	1,156,239	1,053,063
負債合計	9,583,351	9,103,135
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,015,900	2,015,900
資本剰余金	2,355,417	2,355,417
利益剰余金	23,875,275	24,621,589
自己株式	△272,477	△272,477
株主資本合計	27,974,115	28,720,429
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	423,584	338,682
為替換算調整勘定	61,773	37,425
退職給付に係る調整累計額	△6,417	25,401
その他の包括利益累計額合計	478,939	401,509
純資産合計	28,453,055	29,121,938
負債純資産合計	38,036,406	38,225,073

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	21,696,437	23,657,329
売上原価	※1 16,743,260	※1 18,329,016
売上総利益	4,953,176	5,328,313
販売費及び一般管理費		
貸倒引当金繰入額	136	△398
給料及び手当	883,463	981,356
賞与引当金繰入額	128,005	132,262
役員賞与引当金繰入額	24,972	17,660
退職給付費用	44,230	42,566
研究開発費	※2 772,538	※2 763,643
その他	1,988,311	2,254,314
販売費及び一般管理費合計	3,841,658	4,191,404
営業利益	1,111,518	1,136,908
営業外収益		
受取利息	14,277	17,193
受取配当金	33,125	32,187
為替差益	—	25,613
助成金収入	14,736	20,744
その他	66,870	94,471
営業外収益合計	129,009	190,210
営業外費用		
支払利息	2,185	3,157
固定資産除売却損	7,857	23,197
為替差損	17,525	—
その他	3,565	8,793
営業外費用合計	31,133	35,148
経常利益	1,209,393	1,291,970
特別利益		
投資有価証券売却益	—	88,139
特別利益合計	—	88,139
特別損失		
固定資産除売却損	—	※3 54,929
特別損失合計	—	54,929
税金等調整前当期純利益	1,209,393	1,325,180
法人税、住民税及び事業税	424,028	376,664
法人税等調整額	△100,381	△10,543
法人税等合計	323,647	366,120
当期純利益	885,746	959,060
親会社株主に帰属する当期純利益	885,746	959,060

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	885,746	959,060
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	40,943	△84,901
為替換算調整勘定	10,547	△24,348
退職給付に係る調整額	△18,328	31,819
その他の包括利益合計	※ 33,162	※ △77,430
包括利益	918,909	881,629
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	918,909	881,629
非支配株主に係る包括利益	—	—

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	2,015,900	2,355,417	23,202,275	△272,477	27,301,115
当期変動額					
剰余金の配当			△212,746		△212,746
親会社株主に帰属する当期純利益			885,746		885,746
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	672,999	—	672,999
当期末残高	2,015,900	2,355,417	23,875,275	△272,477	27,974,115

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調 整累計額	その他の包括利 益累計額合計	
当期首残高	382,640	51,225	11,910	445,776	27,746,892
当期変動額					
剰余金の配当					△212,746
親会社株主に帰属する当期純利益					885,746
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	40,943	10,547	△18,328	33,162	33,162
当期変動額合計	40,943	10,547	△18,328	33,162	706,162
当期末残高	423,584	61,773	△6,417	478,939	28,453,055

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	2,015,900	2,355,417	23,875,275	△272,477	27,974,115
当期変動額					
剰余金の配当			△212,746		△212,746
親会社株主に帰属する当期純利益			959,060		959,060
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	746,313	—	746,313
当期末残高	2,015,900	2,355,417	24,621,589	△272,477	28,720,429

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調 整累計額	その他の包括利 益累計額合計	
当期首残高	423,584	61,773	△6,417	478,939	28,453,055
当期変動額					
剰余金の配当					△212,746
親会社株主に帰属する当期純利益					959,060
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△84,901	△24,348	31,819	△77,430	△77,430
当期変動額合計	△84,901	△24,348	31,819	△77,430	668,883
当期末残高	338,682	37,425	25,401	401,509	29,121,938

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,209,393	1,325,180
減価償却費	736,496	897,448
のれん償却額	11,277	36,132
貸倒引当金の増減額(△は減少)	354	△248
賞与引当金の増減額(△は減少)	37,264	6,338
役員賞与引当金の増減額(△は減少)	7,368	△7,312
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	29,566	21,243
受取利息及び受取配当金	△47,402	△49,381
支払利息	2,185	3,157
為替差損益(△は益)	3,336	△4,625
固定資産除却損	7,505	75,345
投資有価証券売却損益(△は益)	—	△89,709
売上債権の増減額(△は増加)	△146,095	△852,493
たな卸資産の増減額(△は増加)	△1,607,788	44,783
仕入債務の増減額(△は減少)	1,362,504	△573,480
前受金の増減額(△は減少)	260,170	323,123
その他	△351,448	404,748
小計	1,514,689	1,560,249
利息及び配当金の受取額	47,056	48,050
利息の支払額	△2,162	△3,136
法人税等の支払額	△306,035	△455,907
法人税等の還付額	17,967	—
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,271,514	1,149,256
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△488,640	△233,006
定期預金の払戻による収入	204,000	228,000
有価証券の売却及び償還による収入	—	100,000
有形固定資産の取得による支出	△1,104,186	△1,258,316
有形固定資産の売却による収入	378	7,128
事業譲受による支出	※2 △200,000	※2 △253,233
投資有価証券の取得による支出	△109,048	△1,001,067
投資有価証券の売却及び償還による収入	98,826	92,807
その他の収入	1,740	5,549
その他の支出	△45,967	△45,566
投資活動によるキャッシュ・フロー	△1,642,896	△2,357,703
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	200,000	—
長期借入金の返済による支出	△88,343	△80,080
リース債務の返済による支出	△89,358	△97,895
配当金の支払額	△212,746	△212,746
財務活動によるキャッシュ・フロー	△190,447	△390,722
現金及び現金同等物に係る換算差額	4,018	△12,374
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△557,811	△1,611,544
現金及び現金同等物の期首残高	11,009,914	10,452,102
現金及び現金同等物の期末残高	※1 10,452,102	※1 8,840,558

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

子会社の株式会社ニッコー、タカノ機械株式会社、台湾鷹野股份有限公司、上海鷹野商貿有限公司、香港鷹野国際有限公司の5社を連結の対象としております。

2. 持分法の適用に関する事項

関連会社のオプトウェア株式会社、株式会社ヨウホク、株式会社宮田ニューホールドについては、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

上記、株式会社宮田ニューホールドは2018年11月16日付で解散を決議し、当連結会計年度末現在清算手続き中であります。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち台湾鷹野股份有限公司、上海鷹野商貿有限公司及び香港鷹野国際有限公司の決算日は12月31日であります。

連結財務諸表の作成に当たっては、同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

イ. 有価証券

(イ) 満期保有目的の債券
償却原価法(定額法)

(ロ) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

ロ. たな卸資産

(イ) 商品及び製品、仕掛品、原材料

総平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

なお、検査計測装置にかかる製品、仕掛品については個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

(ロ) 貯蔵品

最終仕入原価法による原価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

イ. 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 7年～50年

機械装置及び運搬具 4年～13年

その他 2年～15年

ロ. 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

なお、主な償却期間は以下のとおりであります。

ソフトウェア(自社利用)

社内における見込利用可能期間(5年)

ハ. リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が2008年3月31日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

イ. 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率等により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

ロ. 賞与引当金

当社及び連結子会社の一部は、従業員の賞与の支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

ハ. 役員賞与引当金

当社及び国内連結子会社は役員賞与の支出に備えるため、当連結会計年度における支給見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

イ. 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

ロ. 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法で処理しております。数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

ハ. 未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の処理方法

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

(5) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

イ. ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。

なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理によっております。

ロ. ヘッジ手段とヘッジ対象

(通貨関連)

ヘッジ手段…為替予約

ヘッジ対象…外貨建債権債務および外貨建予定取引

ハ. ヘッジ方針

当社の内規である「デリバティブ取引管理規程」に基づき、為替変動リスクをヘッジしております。

ニ. ヘッジ有効性の評価の方法

ヘッジ対象とヘッジ手段について、相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、その変動額の比率によって有効性を評価しております。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(連結貸借対照表関係)

※1 連結会計年度末日満期手形等

連結会計年度末日満期手形及び電子記録債務の会計処理については、手形交換日又は決済日をもって決済処理をしております。なお、当連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形及び電子記録債務が連結会計年度末日残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	31,740千円	44,131千円
支払手形	97,645	88,344
電子記録債務	501,972	491,320
流動負債その他(設備支払手形)	19,440	5,544

※2 関連会社に対するものが次のとおり含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	4,900千円	4,900千円

(連結損益計算書関係)

※1 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。△表示は洗替による戻入額の純額を意味しております。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	95,934千円	△29,307千円

※2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	772,538千円	763,643千円

※3 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	—千円	54,875千円
機械装置及び運搬具	—	0
その他	—	53
計	—	54,929

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	58,421千円	△117,889千円
組替調整額	1,174	△1,570
税効果調整前	59,595	△119,459
税効果額	△18,652	34,558
その他有価証券評価差額金	40,943	△84,901
為替換算調整勘定：		
当期発生額	10,547	△24,348
為替換算調整勘定	10,547	△24,348
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△31,806	39,539
組替調整額	5,057	6,311
税効果調整前	△26,749	45,850
税効果額	8,421	△14,031
退職給付に係る調整額	△18,328	31,819
その他の包括利益合計	33,162	△77,430

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	15,721,000	—	—	15,721,000
合計	15,721,000	—	—	15,721,000
自己株式				
普通株式	524,811	—	—	524,811
合計	524,811	—	—	524,811

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年5月12日 取締役会	普通株式	212,746	14	2017年3月31日	2017年6月9日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年5月14日 取締役会	普通株式	212,746	利益剰余金	14	2018年3月31日	2018年6月8日

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	15,721,000	—	—	15,721,000
合計	15,721,000	—	—	15,721,000
自己株式				
普通株式	524,811	—	—	524,811
合計	524,811	—	—	524,811

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2018年5月14日 取締役会	普通株式	212,746	14	2018年3月31日	2018年6月8日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年5月17日 取締役会	普通株式	243,139	利益剰余金	16	2019年3月31日	2019年6月7日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	10,776,402千円	9,168,714千円
預入期間が3か月を 超える定期預金	△324,300	△328,156
現金及び現金同等物	10,452,102	8,840,558

※2 事業譲受により増加した資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(リース取引関係)

1. ファイナンスリース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

(ア) 有形固定資産

主として、住生活関連機器事業における工場生産設備、車両、通信設備等(機械装置及び運搬具、有形固定資産その他)であります。

(イ) 無形固定資産

その他の事業(機械・工具等の販売に係る事業)におけるソフトウェアであります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位:千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	4,403	—
1年超	—	—
合計	4,403	—

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、当社グループが行う事業の投資計画を含む事業計画に照らして必要な資金を主に自己資金でまかなうとともに、必要に応じて銀行借入により調達しております。余剰の生じた資金については、資産の効率性と安全性を鑑み、比較的安全性の高い金融資産で運用しております。また、一部の余剰資金においては、金利スワップ及び金利オプションが組み込まれた複合金融商品にて運用しておりますが、組込デリバティブのリスクが現物の金融資産に及ぶ可能性がある金融商品を購入しないこととし、その他デリバティブについては、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

また、短期的な運転資金は必要に応じて銀行借入にて調達しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクにさらされております。また、海外での事業や海外取引先との取引にて生ずる外貨建の営業債権は、為替の変動リスクにさらされております。

有価証券及び投資有価証券は、主に株式、債券及び投資信託であり、このうち株式は主として業務上の関係を有する企業の株式であります。

これらは、市場価格及び金利の変動リスクにさらされております。

営業債務である支払手形及び買掛金、電子記録債務ならびに未払法人税等は、そのほとんどが短期間で決済されるものであり、一部外貨建のものについては、為替の変動リスクにさらされております。

借入金及びファイナンス・リース取引に係るリース債務は、主に設備投資に係る資金調達を目的としたものであり、償還日は最長で決算日後7年10ヶ月であります。これらの債務については資金調達に係る流動性リスクにさらされております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、販売管理規程に従い、営業債権について、各事業部門における営業部門が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の販売管理規程に準じた管理を行っております。

デリバティブ取引については、取引相手先を高格付けを有する金融機関に限定しているため信用リスクはほとんどないと認識しております。

②市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社は、外貨建の営業債権債務について通貨別に定期的な管理を行っており、その金額的重要性により必要に応じて、為替予約を利用してヘッジしております。

有価証券及び投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、また、市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限及び取引限度等を定めた社内管理規程に従って経理部が決裁権限者の承認を得て行っております。連結子会社においてはデリバティブ取引は行っておりません。

③資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払を実行できなくなるリスク）の管理

当社は、各部署からの報告に基づき担当部署である経理部が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手元流動性の一定水準の維持などにより、流動性リスクを管理しております。連結子会社においても当社に準じた管理を行っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。また、注記事項「デリバティブ取引関係」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引にかかる市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	10,776,402	10,776,402	—
(2) 受取手形及び売掛金	8,361,910	8,361,910	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	2,660,493	2,666,206	5,712
資産計	21,798,806	21,804,519	5,712
(1) 支払手形及び買掛金	1,986,512	1,986,512	—
(2) 電子記録債務	2,759,614	2,759,614	—
(3) 未払法人税等	369,738	369,738	—
(4) 長期借入金（※1）	329,140	329,153	13
(5) リース債務（※2）	30,422	30,422	—
負債計	5,475,427	5,475,441	13

（※1）1年内返済予定長期借入金82,580千円を含めております。

（※2）利息相当額を控除しない方法によっているリース債務252,864千円は含まれておりません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	9,168,714	9,168,714	—
(2) 受取手形及び売掛金	9,203,021	9,203,021	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	3,437,737	3,442,159	4,421
資産計	21,809,473	21,813,895	4,421
(1) 支払手形及び買掛金	1,556,654	1,556,654	—
(2) 電子記録債務	2,607,843	2,607,843	—
(3) 未払法人税等	286,608	286,608	—
(4) 長期借入金（※1）	249,060	249,401	341
(5) リース債務（※2）	70,805	70,805	—
負債計	4,770,972	4,771,314	341

（※1）1年内返済予定長期借入金82,580千円を含めております。

（※2）利息相当額を控除しない方法によっているリース債務216,637千円は含まれておりません。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法及び有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっております。また、投資信託については、公表されている基準価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 電子記録債務、(3) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 長期借入金、(5) リース債務

これらの時価は、元利金の合計額を、同様の新規借入又はリース取引を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照下さい。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式	57,102	57,284

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3)有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。なお、非上場株式には関連会社株式4,900千円が含まれております。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	10,776,402	—	—	—
受取手形及び売掛金	8,361,910	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 社債	—	—	—	—
(2) その他	100,000	300,000	200,000	200,000
その他有価証券のうち満期 があるもの				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	30,000	—	—
(3) その他	—	—	—	—
合計	19,238,312	330,000	200,000	200,000

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	9,168,714	—	—	—
受取手形及び売掛金	9,203,021	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 社債	—	—	—	—
(2) その他	—	300,000	800,000	600,000
その他有価証券のうち満期 があるもの				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	30,000	—	—	—
(3) その他	—	—	—	—
合計	18,401,736	300,000	800,000	600,000

4. 長期借入金及びリース債務の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度（2018年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	82,580	80,080	70,080	70,080	26,320	—
リース債務	87,869	80,539	52,215	25,255	19,751	17,654
合計	170,449	160,619	122,295	95,335	46,071	17,654

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	82,580	70,080	70,080	26,320	—	—
リース債務	96,231	67,900	41,087	35,734	22,507	23,980
合計	178,811	137,980	111,167	62,054	22,507	23,980

(有価証券関係)

1. 満期保有目的の債券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	(1) 社債	—	—	—
	(2) その他	400,000	406,852	6,852
	小計	400,000	406,852	6,852
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	(1) 社債	—	—	—
	(2) その他	400,000	398,860	△1,140
	小計	400,000	398,860	△1,140
合計		800,000	805,712	5,712

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	(1) 社債	—	—	—
	(2) その他	900,000	908,431	8,431
	小計	900,000	908,431	8,431
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	(1) 社債	—	—	—
	(2) その他	800,000	795,990	△4,010
	小計	800,000	795,990	△4,010
合計		1,700,000	1,704,421	4,421

2. その他有価証券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,014,382	472,330	542,052
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	132,729	130,206	2,522
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	336,932	317,055	19,877
	小計	1,484,044	919,591	564,453
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	314,669	319,428	△4,759
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	61,780	65,652	△3,872
	小計	376,449	385,080	△8,631
合計		1,860,493	1,304,672	555,821

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 52,202千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	種類	連結貸借対照表計上額（千円）	取得原価（千円）	差額（千円）
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	934,028	454,780	479,248
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	131,616	130,206	1,409
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	342,501	317,171	25,330
	小計	1,408,146	902,157	505,989
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	267,882	333,553	△65,670
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	61,708	64,452	△2,744
	小計	329,590	398,005	△68,414
	合計	1,737,737	1,300,163	437,574

(注) 非上場株式（連結貸借対照表計上額 52,384千円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

3. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

種類	売却額（千円）	売却益の合計額（千円）	売却損の合計額（千円）
(1) 株式	—	—	—
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	91,244	89,709	—
合計	91,244	89,709	—

4. 減損処理を行った有価証券

該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
前連結会計年度 (2018年3月31日)

組込デリバティブを区分して処理する必要のない複合金融商品については、組込デリバティブを組込対象である金融資産と区分せず一体として、時価評価あるいは発生主義による期間損益計算を行っております。なお、当期におきましては組込デリバティブを区分して処理する必要のない複合金融商品以外のデリバティブ取引については該当事項はありません。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

組込デリバティブを区分して処理する必要のない複合金融商品については、組込デリバティブを組込対象である金融資産と区分せず一体として、時価評価あるいは発生主義による期間損益計算を行っております。なお、当期におきましては組込デリバティブを区分して処理する必要のない複合金融商品以外のデリバティブ取引については該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社および連結子会社の一部は、確定給付型の制度として、退職一時金制度および厚生年金基金制度（総合設立型）を設けており、また、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を設けております。このうち、厚生年金基金制度（総合設立型）については、自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができない制度であり、確定拠出制度と同様に会計処理しております。なお、厚生年金基金の代行部分について、2016年3月1日に厚生労働大臣から将来分支給義務免除の認可を受けております。国内連結子会社1社は、中小企業退職金共済制度へ加入しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	461,288千円	522,922千円
勤務費用	29,362	34,058
利息費用	2,230	2,674
数理計算上の差異の発生額	31,806	△39,539
退職給付の支払額	△1,619	△15,225
その他	△147	△851
退職給付債務の期末残高	522,922	504,039

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	－千円	－千円
年金資産	－	－
非積立型制度の退職給付債務	522,922	504,039
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	522,922	504,039
退職給付に係る負債	522,922	504,039
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	522,922	504,039

(3) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	29,362千円	34,058千円
利息費用	2,230	2,674
数理計算上の差異処理額	34,350	35,604
過去勤務差異の費用処理額	△29,293	△29,293
確定給付制度に係る退職給付費用	36,650	43,044

(4) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	△2,543千円	△75,143千円
未認識過去勤務費用	29,293	29,293
合計	26,749	△45,850

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	126,665千円	51,521千円
未認識過去勤務費用	△117,172	△87,879
合計	9,493	△36,357

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表しております。）

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率	0.51～0.52%	0.32～0.33%
予想昇給率	2018年3月31日を基準日として算定した年齢別昇給指数を使用しております。	2019年3月31日を基準日として算定した年齢別昇給指数を使用しております。

3. 確定拠出制度

確定拠出制度（確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の厚生年金基金制度を含む。）への要拠出額は、前連結会計年度137,363千円、当連結会計年度122,703千円であります。

要拠出額を退職給付費用として処理している複数事業主制度に関する事項

(1) 日本ばね工業厚生年金基金

当社および一部連結子会社が加入していた日本ばね工業厚生年金基金は、2017年9月25日付で厚生労働大臣の認可を得て解散したため、当連結会計年度における同基金の制度全体に関する事項、制度全体に占める当社グループの掛金拠出割合、及び補足説明に関する事項については記載しておりません。

なお、同基金は当連結会計年度末現在、清算手続中ではありますが、解散にともなう損失負担は発生しない見込みであります。

①複数事業主制度の直近の積立状況

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
年金資産の額	61,252,423千円	—千円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	61,609,488	—
差引額	△357,064	—

②複数事業主制度に占める当社グループの掛金拠出割合

前連結会計年度 5.15% (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

当連結会計年度 ー% (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

③補足説明

上記①の差引額の主な要因は年金財政計算上の過去勤務債務残高（前連結会計年度4,998,853千円）および剰余金（前連結会計年度4,641,788千円）であります。本制度における過去勤務債務の償却方法は20年の元利均等償却であります。

(2) ベネフィット・ワン企業年金基金

①複数事業主制度の直近の積立状況

	前連結会計年度 (2017年6月30日)	当連結会計年度 (2018年6月30日)
年金資産の額	11,706,332千円	21,613,136千円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	11,271,411	20,978,709
差引額	434,921	634,427

②複数事業主制度に占める当社グループの掛金拠出割合

前連結会計年度 0.10% (自 2016年7月1日 至 2017年6月30日)

当連結会計年度 0.23% (自 2017年7月1日 至 2018年6月30日)

③補足説明

上記①の差引額の主な要因は別途積立金（前連結会計年度329,206千円、当連結会計年度434,921千円）および当年度剰余金（前連結会計年度105,715千円、当連結会計年度199,505千円）であります。

なお、上記②の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	(千円)	(千円)
繰延税金資産		
賞与引当金	136,308	137,964
未払事業税	27,406	22,688
未払社会保険料	21,184	20,442
未実現利益	18,963	15,257
たな卸資産評価損	140,621	131,875
未払費用	35,135	32,815
未払金	2,634	19,265
販売手数料	3,291	6,038
退職給付に係る負債	157,254	152,084
長期末払金	57,620	57,082
貸倒引当金	1,779	1,824
みなし配当金	23,217	23,217
減価償却費	118,320	144,634
減損損失	130,263	130,026
投資有価証券評価損	70,940	56,965
関係会社株式評価損	2,992	2,992
その他	32,345	17,878
小計	980,281	973,054
評価性引当額	△298,222	△289,663
繰延税金資産合計	682,059	683,390
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△133,320	△97,740
在外子会社の留保利益	△16,785	△20,742
繰延税金資産の純額	531,953	564,906

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	29.9%	29.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.4	1.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.1	△0.1
住民税均等割等	0.9	0.9
外国税額	0.5	0.2
法人税額の特別控除額	△6.6	△3.1
評価性引当額の増減	0.5	△1.5
連結子会社の税率差異	△0.3	△0.2
在外子会社の留保利益	0.3	0.3
その他	0.3	△0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.8	27.6

(企業結合等関係)

(取得による企業結合)

当社は、2018年6月18日に株式会社トプコンおよび株式会社トプコンの子会社である株式会社トプコンテクノハウスとの間で、半導体ウェーハ表面検査装置事業およびプロキシミティ露光装置事業の事業譲渡契約を締結し、2018年7月31日に同契約に基づき、株式会社トプコンおよび株式会社トプコンテクノハウスより当該事業を譲り受けました。

1. 企業結合の概要

(1) 相手企業の名称およびその事業の内容

相手企業の名称	株式会社トプコンおよび株式会社トプコンテクノハウス
取得した事業の内容	半導体ウェーハ表面検査装置の製造・販売・保守 プロキシミティ露光装置の製造・販売・保守

(2) 企業結合を行った主な理由

当社グループの検査計測機器セグメントにおける半導体等関連検査装置分野の事業強化を図ることを目的としております。

(3) 企業結合日

2018年7月31日

(4) 企業結合の法的形式

事業譲受

(5) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が、現金を対価として半導体関連分野にかかる半導体ウェーハ表面検査装置（WM）事業およびプロキシミティ露光装置（TME）事業を譲り受けたためであります。

2. 連結損益計算書に含まれる取得した事業の業績の期間

2018年7月31日から2019年3月31日まで

3. 取得した事業の取得原価および対価の種類ごとの内訳

契約当事者間の合意により非開示とさせていただきます。

4. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法および償却期間

(1) 発生したのれん金額

68,000千円

(2) 発生原因

今後の事業展開によって期待される将来の超過収益力から発生したものであります。

(3) 償却方法および償却期間

5年間にわたる均等償却

(資産除去債務関係)

該当事項はありません。

(賃貸等不動産関係)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、最高経営意思決定機関である経営会議が経営資源の配分の決定及び業績の評価をするために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、製品・サービス別の事業部門を置き、各事業部門は国内及び海外の包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。そのため、当社グループは当該事業部門を基礎とした製品・サービス別の事業セグメントにより構成されております。

当社グループはこれらの事業セグメントのうち、報告すべきセグメントである「住生活関連機器」、「検査計測機器」、「産業機器」、「エクステリア」、「機械・工具」の5つを報告セグメントとしております。

「住生活関連機器」は、オフィス用、福祉・医療施設用の椅子等を製造販売しております。「検査計測機器」は、液晶等の検査計測装置等を製造販売しております。「産業機器」は電磁アクチュエータ等、ユニット(ばね)製品を製造販売しております。「エクステリア」は跳ね上げ式門扉、カーポート、テラス、オーニング等を製造販売しております。「機械・工具」は機械・工具等の仕入販売に関する事業であります。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、連結財務諸表を作成するために採用される会計処理の原則及び手続と同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益(のれん償却後)ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:千円)

	報告セグメント					合計
	住生活関連機器	検査計測機器	産業機器	エクステリア	機械・工具	
売上高						
外部顧客への売上高	10,211,180	6,847,923	2,393,920	975,727	1,267,684	21,696,437
セグメント間の内部売上高又は振替高	57,939	57,461	22,812	11,709	890,396	1,040,319
計	10,269,120	6,905,384	2,416,733	987,437	2,158,081	22,736,757
セグメント利益又はセグメント損失(△)	480,146	276,668	286,497	△156	104,868	1,148,024
セグメント資産	10,277,889	9,574,293	3,602,071	938,934	1,641,386	26,034,574
その他の項目						
減価償却費	426,908	142,778	137,290	20,301	19,879	747,158
のれん償却額	—	11,277	—	—	—	11,277
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	904,778	358,451	399,093	38,251	8,174	1,708,749

（単位：千円）

	報告セグメント					合計
	住生活関連 機器	検査計測 機器	産業機器	エクステ リア	機械・工具	
売上高						
外部顧客への売上高	10,572,071	8,214,610	2,329,152	910,617	1,630,877	23,657,329
セグメント間の内部売上高又は 振替高	59,970	2,366	12,849	8,402	448,302	531,892
計	10,632,041	8,216,977	2,342,002	919,019	2,079,180	24,189,222
セグメント利益又はセグメント損 失（△）	353,574	508,556	179,190	△6,209	79,747	1,114,860
セグメント資産	10,299,040	10,971,110	3,254,983	993,230	1,515,532	27,033,897
その他の項目						
減価償却費	510,528	129,764	177,047	23,472	20,089	860,902
のれん償却額	—	36,132	—	—	—	36,132
有形固定資産及び無形固定資産 の増加額	700,830	408,678	132,630	19,871	1,302	1,263,314

4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容（差異調整に関する事項）

（単位：千円）

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	22,736,757	24,189,222
セグメント間取引消去	△1,040,319	△531,892
連結財務諸表の売上高	21,696,437	23,657,329

（単位：千円）

利益又は損失	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	1,148,024	1,114,860
セグメント間取引消去	△36,506	22,048
連結財務諸表の営業利益	1,111,518	1,136,908

(単位：千円)

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	26,034,574	27,033,897
全社資産（注）	12,675,642	11,421,140
その他の調整額	△673,809	△229,964
連結財務諸表の資産合計	38,036,406	38,225,073

（注）全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない余資運用資金（現金預金および有価証券）、長期投資資金（投資有価証券）等であります。

(単位：千円)

その他の項目	報告セグメント計		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度
減価償却費	747,158	860,902	△10,661	36,545	736,496	897,448
のれん償却額	11,277	36,132	—	—	11,277	36,132
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,708,749	1,263,314	△30,328	△4,470	1,678,421	1,258,843

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	オフィス用椅子	検査計測装置	電磁アクチュエータ等	その他	合計
外部顧客への売上高	8,733,869	6,490,170	1,954,114	4,518,282	21,696,437

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	中国	アジア	北米	その他	合計
16,237,381	2,321,855	3,041,175	84,401	11,624	21,696,437

（注）売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
コクヨ株式会社	8,041,139	住生活関連機器
AU Optronics Corporation	2,199,743	検査計測機器

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	オフィス用 椅子	検査計測 装置	電磁アクチュ エータ等	その他	合計
外部顧客への売上高	9,279,308	7,423,525	1,923,828	5,030,667	23,657,329

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	中国	アジア	北米	その他	合計
17,497,054	4,185,789	1,844,764	115,955	13,765	23,657,329

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
コクヨ株式会社	8,437,006	住生活関連機器

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：千円)

	住生活関連 機器	検査計測機器	産業機器	エクステリア	機械・工具	合計
当期償却額	—	11,277	—	—	—	11,277
当期末残高	—	124,053	—	—	—	124,053

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(単位：千円)

	住生活関連 機器	検査計測機器	産業機器	エクステリア	機械・工具	合計
当期償却額	—	36,132	—	—	—	36,132
当期末残高	—	155,920	—	—	—	155,920

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

前連結会計年度（自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
法人主要株主	ココヨ株式会社	大阪市東成区	15,847	オフィス家具の製造販売	(所有) 直接 0.07 (被所有) 直接 14.16 間接 1.09	製品の販売	製品の販売	8,040,204	受取手形及び売掛金	3,650,565

当連結会計年度（自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
法人主要株主	ココヨ株式会社	大阪市東成区	15,847	オフィス家具の製造販売	(所有) 直接 0.07 (被所有) 直接 14.16 間接 1.09	製品の販売	製品の販売	8,437,006	受取手形及び売掛金	3,631,903

- (注) 1. 上記の金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。
2. 取引条件及び取引条件の決定方針等
当社製品の販売については、市場価格にもとづき交渉のうえ決定しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

前連結会計年度（自2017年 4月 1日 至2018年 3月 31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
法人主要株主	ココヨ株式会社	大阪市東成区	15,847	オフィス家具の製造販売	—	製品の販売	製品の販売	935	受取手形及び売掛金	—

当連結会計年度（自2018年 4月 1日 至2019年 3月 31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
法人主要株主	ココヨ株式会社	大阪市東成区	15,847	オフィス家具の製造販売	—	製品の販売	製品の販売	—	受取手形及び売掛金	—

- (注) 1. 上記の金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。
2. 取引条件及び取引条件の決定方針等
当社製品の販売については、市場価格にもとづき交渉のうえ決定しております。

(開示対象特別目的会社関係)

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	1,872.38円	1,916.40円
1株当たり当期純利益	58.29円	63.11円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額(千円)	28,453,055	29,121,938
純資産の部の合計額から控除する金額 (千円)	—	—
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	28,453,055	29,121,938
1株当たり純資産額の算定に用いられた期 末の普通株式の数(株)	15,196,189	15,196,189

3. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益 (千円)	885,746	959,060
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期 純利益(千円)	885,746	959,060
期中平均株式数(株)	15,196,189	15,196,189

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	—	—	—	—
1年以内に返済予定の長期借入金	82,580	82,580	0.601	—
1年以内に返済予定のリース債務	87,869	96,231	1.930	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	246,560	166,480	0.586	2020年～22年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	195,416	191,211	1.930	2020年～27年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	612,426	536,503	—	—

(注) 1. 平均利率は、期末の利率及び残高に基づく加重平均利率であります。なお、リース債務に係る平均利率は、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する方法により算定したリース債務に係る期末の利率及び残高に基づく加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年間の返済予定額は次のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	70,080	70,080	26,320	—
リース債務	67,900	41,087	35,734	22,507

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	5,742,489	10,967,122	16,055,113	23,657,329
税金等調整前四半期(当期) 純利益(千円)	396,561	532,532	598,954	1,325,180
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益(千円)	267,096	389,301	404,408	959,060
1株当たり四半期(当期)純 利益(円)	17.58	25.62	26.61	63.11

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	17.58	8.04	0.99	36.50

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	9,691,978	7,799,549
受取手形	※1, ※2 499,909	※1, ※2 744,835
売掛金	※2 7,224,583	※2 7,730,881
有価証券	100,000	30,216
商品及び製品	670,737	467,482
仕掛品	3,660,596	3,775,559
原材料及び貯蔵品	866,291	1,152,973
その他	423,710	146,329
貸倒引当金	△108	△75
流動資産合計	23,137,698	21,847,751
固定資産		
有形固定資産		
建物	2,367,562	2,364,541
構築物	123,524	162,493
機械及び装置	852,941	1,063,315
車両運搬具	2,447	1,706
工具、器具及び備品	292,502	327,800
土地	4,170,341	4,170,341
リース資産	298,188	264,361
建設仮勘定	423,944	479,552
有形固定資産合計	8,531,452	8,834,110
無形固定資産		
ソフトウェア	149,295	121,530
のれん	124,053	155,920
その他	56,465	45,645
無形固定資産合計	329,814	323,096
投資その他の資産		
投資有価証券	2,606,022	3,452,041
関係会社株式	450,963	450,963
関係会社出資金	47,350	47,350
繰延税金資産	479,592	532,636
その他	486,430	485,930
貸倒引当金	△6,048	△6,198
投資その他の資産合計	4,064,310	4,962,723
固定資産合計	12,925,577	14,119,930
資産合計	36,063,275	35,967,682

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	※1 216,396	※1 196,604
買掛金	※2 1,141,143	※2 1,053,939
電子記録債務	※1,※2 3,035,889	※1,※2 2,625,775
リース債務	79,344	80,452
未払法人税等	307,350	245,211
前受金	1,238,542	1,589,116
賞与引当金	409,224	399,779
役員賞与引当金	23,287	16,088
その他	※1 1,608,363	※1 1,370,920
流動負債合計	8,059,542	7,577,888
固定負債		
長期借入金	246,560	166,480
リース債務	163,224	128,482
退職給付引当金	479,307	501,723
その他	181,200	179,400
固定負債合計	1,070,291	976,086
負債合計	9,129,834	8,553,974
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,015,900	2,015,900
資本剰余金		
資本準備金	2,157,140	2,157,140
その他資本剰余金	198,277	198,277
資本剰余金合計	2,355,417	2,355,417
利益剰余金		
利益準備金	503,975	503,975
その他利益剰余金		
別途積立金	20,000,000	20,500,000
繰越利益剰余金	1,908,420	1,974,229
利益剰余金合計	22,412,395	22,978,204
自己株式	△272,477	△272,477
株主資本合計	26,511,235	27,077,044
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	422,205	336,662
評価・換算差額等合計	422,205	336,662
純資産合計	26,933,441	27,413,707
負債純資産合計	36,063,275	35,967,682

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	19,352,376	20,547,264
売上原価	14,983,960	15,931,296
売上総利益	4,368,416	4,615,968
販売費及び一般管理費	※1 3,452,230	※1 3,777,300
営業利益	916,185	838,667
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	※2 84,024	※2 90,677
その他	78,157	130,893
営業外収益合計	162,182	221,571
営業外費用		
支払利息	1,431	1,714
固定資産除売却損	6,861	23,309
為替差損	18,332	—
その他	2,906	8,769
営業外費用合計	29,531	33,792
経常利益	1,048,836	1,026,445
特別利益		
投資有価証券売却益	—	88,139
特別利益合計	—	88,139
特別損失		
固定資産除売却損	—	※3 54,929
特別損失合計	—	54,929
税引前当期純利益	1,048,836	1,059,656
法人税、住民税及び事業税	345,854	299,262
法人税等調整額	△82,874	△18,161
法人税等合計	262,980	281,100
当期純利益	785,856	778,555

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計		別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	2,015,900	2,157,140	198,277	2,355,417	503,975	19,500,000	1,835,310	21,839,285
当期変動額								
剰余金の配当							△212,746	△212,746
当期純利益							785,856	785,856
別途積立金の積立						500,000	△500,000	—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	—	—	—	500,000	73,109	573,109
当期末残高	2,015,900	2,157,140	198,277	2,355,417	503,975	20,000,000	1,908,420	22,412,395

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△272,477	25,938,125	381,226	381,226	26,319,352
当期変動額					
剰余金の配当		△212,746			△212,746
当期純利益		785,856			785,856
別途積立金の積立		—			—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			40,979	40,979	40,979
当期変動額合計	—	573,109	40,979	40,979	614,088
当期末残高	△272,477	26,511,235	422,205	422,205	26,933,441

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金 合計
						別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	2,015,900	2,157,140	198,277	2,355,417	503,975	20,000,000	1,908,420	22,412,395
当期変動額								
剰余金の配当							△212,746	△212,746
当期純利益							778,555	778,555
別途積立金の積立						500,000	△500,000	—
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)								
当期変動額合計	—	—	—	—	—	500,000	65,809	565,809
当期末残高	2,015,900	2,157,140	198,277	2,355,417	503,975	20,500,000	1,974,229	22,978,204

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差 額等合計	
当期首残高	△272,477	26,511,235	422,205	422,205	26,933,441
当期変動額					
剰余金の配当		△212,746			△212,746
当期純利益		778,555			778,555
別途積立金の積立		—			—
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)			△85,543	△85,543	△85,543
当期変動額合計	—	565,809	△85,543	△85,543	480,266
当期末残高	△272,477	27,077,044	336,662	336,662	27,413,707

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

① 満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）

② 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

③ その他の有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

① 商品及び製品、仕掛品、原材料

総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

なお、検査計測装置に係る製品、仕掛品については個別法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

② 貯蔵品

最終仕入原価法による原価法

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 15年～50年

構築物 7年～50年

機械及び装置 7年～13年

車両運搬具 4年～5年

工具、器具及び備品 2年～15年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法

なお、主な償却期間は以下のとおりであります。

意匠出願権 7年

ソフトウェア（自社利用）

社内における見込利用可能期間（5年）

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が2008年3月31日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員賞与の支出に備えるため、当事業年度における支給見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上しております。

過去勤務費用の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により処理をしております。数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

4. ヘッジ会計の方法

(1)ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。

なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理によっております。

(2)ヘッジ手段とヘッジ対象

(通貨関連)

ヘッジ手段…為替予約

ヘッジ対象…外貨建債権債務および外貨建予定取引

(3)ヘッジ方針

当社の内規である「デリバティブ取引管理規程」に基づき、為替変動リスクをヘッジしております。

(4)ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象とヘッジ手段について、相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、その変動額の比率によって有効性を評価しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1)退職給付に係る会計処理

退職給付にかかる未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2)のれんの償却及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(3)消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。）を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」377,570千円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」479,592千円に含めて表示しております。

(貸借対照表関係)

※1 期末日満期手形等

期末日満期手形及び電子記録債務の会計処理については、手形交換日又は決済日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形及び電子記録債務が当事業年度の期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	24,670千円	29,815千円
支払手形	37,347	81,553
電子記録債務	612,062	504,938
流動負債その他(設備支払手形)	19,440	5,544

※2 関係会社項目

関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	28,667千円	41,946千円
短期金銭債務	697,990	309,986

(損益計算書関係)

※1 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度48%、当事業年度47%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度52%、当事業年度53%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料及び手当	673,432千円	769,231千円
賞与引当金繰入額	111,167	109,192
役員賞与引当金繰入額	23,287	16,088
退職給付費用	38,536	36,326
減価償却費	134,989	136,869
研究開発費	772,538	763,643
支払手数料	332,135	356,586
貸倒引当金繰入額	1	△33

※2 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引以外の取引による取引高	38,897千円	45,374千円

※3 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	—千円	54,875千円
機械装置及び運搬具	—	0
その他	—	53
計	—	54,929

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式446,063千円、関連会社株式4,900千円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式446,063千円、関連会社株式4,900千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	(千円)	(千円)
繰延税金資産		
賞与引当金	122,452	119,626
未払事業税	24,366	19,757
未払社会保険料	19,199	17,806
たな卸資産評価損	138,625	129,664
未払金	2,634	19,265
未払費用	35,135	32,815
販売手数料	3,291	6,038
退職給付引当金	143,408	150,115
長期未払金	54,215	53,676
貸倒引当金	1,812	1,847
関係会社株式評価損	2,991	2,991
みなし配当金	23,217	23,217
減価償却費	91,236	117,292
減損損失	130,263	130,026
投資有価証券評価損	70,879	56,904
その他	36,411	25,183
小計	900,142	906,229
評価性引当額	△287,926	△275,852
繰延税金資産合計	612,215	630,377
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△132,623	△97,740
繰延税金資産の純額	479,592	532,636

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	29.9%	29.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.4	1.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.2	△1.4
住民税均等割等	0.9	1.1
外国税額	0.5	0.3
法人税額の特別控除額	△7.3	△3.7
評価性引当額の増減	0.4	△1.1
その他	0.4	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	25.0	26.5

(企業結合等関係)

連結財務諸表の注記事項（企業結合等関係）に記載しているため、記載を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	2,367,562	230,377	1,982	231,416	2,364,541	4,541,766
	構築物	123,524	67,055	283	27,803	162,493	523,069
	機械及び装置	852,941	500,541	3,524	286,642	1,063,315	4,001,226
	車両運搬具	2,447	495	1	1,233	1,706	12,291
	工具、器具及び備品	292,502	187,798	2,234	150,266	327,800	2,691,891
	土地	4,170,341	—	—	—	4,170,341	—
	リース資産	298,188	46,210	—	80,038	264,361	369,260
	建設仮勘定	423,944	479,552	423,944	—	479,552	—
	計	8,531,452	1,512,031	431,971	777,401	8,834,110	12,139,505
無形固定資産	ソフトウェア	149,295	37,856	—	65,621	121,530	—
	のれん	124,053	68,000	—	36,132	155,920	—
	その他	56,465	3,318	3,310	10,828	45,645	—
	計	329,814	109,174	3,310	112,582	323,096	—

- (注) 1. 「建物」の「当期増加額」のうち主なものは、住生活関連機器事業の伊那工場塗装棟改修工事71,340千円および伊那工場排水貯槽棟43,417千円、検査計測機器事業の埼玉事業所改修費用22,148千円等であります。
2. 「機械及び装置」の「当期増加額」のうち主なものは、住生活関連機器事業の伊那工場塗装設備347,495千円および下島工場ウレタン発泡設備16,800千円等であります。
3. 「工具器具及び備品」の「当期増加額」のうち主なものは、全社の10ヘッドスポッター46,991千円等であります。
4. 「建設仮勘定」の「当期増加額」のうち主なものは、横浜市に建設中の横浜技術開発センター295,523千円等であります。
5. 「のれん」の「当期増加額」は、検査計測機器事業の半導体関連分野における半導体ウェーハ表面検査装置(WM)およびプロキシミティ露光装置(TME)の事業譲受68,000千円であります。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	6,156	116	—	6,273
賞与引当金	409,224	399,779	409,224	399,779
役員賞与引当金	23,287	16,088	23,287	16,088

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取手数料	無料
公告掲載方法	当会社の公告方法は電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL http://www.takano-net.co.jp/ir/index.html
株主に対する特典	毎年9月30日現在において所有株式数1,000株以上の株主に対し、長野県にちなんだ特産品を、所有株式数100株以上1,000株未満の株主に対し、当社オリジナルの品を年1回贈呈しております。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間において、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第65期）（自2017年4月1日 至2018年3月31日）2018年6月28日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月28日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第66期第1四半期）（自2018年4月1日 至2018年6月30日）2018年8月9日関東財務局長に提出

（第66期第2四半期）（自2018年7月1日 至2018年9月30日）2018年11月9日関東財務局長に提出

（第66期第3四半期）（自2018年10月1日 至2018年12月31日）2019年2月12日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2018年6月29日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月26日

タカノ株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 杉 田 昌 則 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 藤 野 竜 男 印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているタカノ株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、タカノ株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、タカノ株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、タカノ株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月26日

タカノ株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 杉 田 昌 則 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 藤 野 竜 男 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているタカノ株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第66期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、タカノ株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれておりません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月27日
【会社名】	タカノ株式会社
【英訳名】	TAKANO CO., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 鷹野 準
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	長野県上伊那郡宮田村137番地
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長鷹野準は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行ったうえで、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析したうえで、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、会社及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、会社及び連結子会社2社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。なお、連結子会社3社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している2事業拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金および棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測をとまなう重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、2019年3月31日現在の当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月27日
【会社名】	タカノ株式会社
【英訳名】	TAKANO CO., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 鷹野 準
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	長野県上伊那郡宮田村137番地
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長鷹野準は、当社の第66期（自2018年4月1日 至2019年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。